

爺さんは女を好きでなかつたのであらうか。

僕は芭蕉をやはり偉い爺さんにかぞへてゐるが、この間水戸黄門の時代劇を見て實さいは黄門記ではなく、芭蕉の行脚のやうな気がしてならなかつた。おくの細道の行脚は發句道の黄門記のやうなものであつた。一方は大名の隠居で助さん格さんといふ二人の劍客をつれ、一方は會良といふ弟子をつれて旅をしてゐた。二人とも食へない男だつた。けれども行脚に出なければならぬ芭蕉の行き詰つた生活に、僕は痛々しさを感してならなかつた。芭蕉調で天下を席捲したのも、この行脚あつてからだつた。子規が餓鬼のやうになつて病中で發句にもだへてゐると、どれ丈も違はなかつた。人間はその藝道のために元祿のやうな時代にあつてあれほど奮闘しなければならなかつたであらうか。しかも芭蕉はおくの細道の駕に乗つて千住はづれまで行つて、感情的になり、も早生きてかへらぬつもりでゐたのも、野ざらしの死を願ふ彼の本懐であるらしかつたと傳記をつづる人はいふが、あの行脚は生きてかへらねばならぬ行脚だつたのだ。

「枯芝やややかげろふの一二寸」も取りやうによつて、はかない句である。「かれ芝やかくと見るより蝶の殻」よりもつと果敢ない句である。どの句をよんで見ても今日はみな果敢ない句のやうである。發句をよむの日によつて氣持のちがふ意味があるのかも知れぬ。

「ほろほろと山吹ちるか瀧の音」の句の鮮かさは、いまの僕に一杯の清水を與へてくれた。このや

さしい些かの色は途方もなく美しい、瀧がいひやうもなく清げに音を立てて來るからである。

三 閨秀三家

雉子啼いて土いろいろの草となる

里の子の肌まだ白し桃の花

千代女

同

元祿時代にもさうであつたが、昔の俳人は大てい俳畫をかくことを知つてゐた。芭蕉も畫いてゐたし、蕪村は勿論、許六や一茶もうまかつた。それは時代の流行でもあつたらうが、發句を色紙短冊に染筆して金をとるよりも、畫を加へて句を書くと金を遠慮なく取れる原因も手傳つてゐたらしかつた。もつと高尚にいへば俳畫は俳人の常識的な隠し藝のやうなものであり、もつと藝術的にいへば發句のさびしさを畫によつて一そう風景的にさびしがらせようとする、手管のやうなものであつた。かういふところに蕪村の畫業が大成したことは驚くより外はない。

千代女は尼になつてから素圖と號して、畫を描いて句の讀をしてゐた。優しい下手な畫であるが、素人畫のおもしろさのある畫であつた。「雉子啼いて土いろいろの草となる」の春若い色彩は、むしろ日本畫の筆觸であつて誠にやさしい色である。千代がそんなにこまかく土のいろを見詰めてからの句作であるかどうかは疑はしいが、あるひは偶然にかういふ發句のつづりを見せて來た句である

かも知れぬ。春暖の土いろがかうもあらうかと思へるくらゐに美しい色を含んでゐる。雉子の季題をえらんだことも聰明であつた。

千代の句集をよんでゆくうち、「里の子の肌まだ白し桃の花」を読みあてて、官能的とでもいへる一個の生態をつかんで春に配したところも、旨いと思つた。發句の輪講風にしたがつていふと、里の子供は六月になるともう川にはいつて水泳ぎをするものである。そのころは子供の肌のいろは黒い、だのに桃の花の咲く四月末のぼかぼかした暖かい日より、子供らは襦袢一枚になつて柔らかな草の上で、巫山戯たり揉み合つたり笑つたりして肌の白さが際立つて目を反射してゐる。千代の故郷は加賀であるだけに僕には一そうその氣持がわかるのである。

元祿には園女があり羽紅がゐたが、やはり閑秀俳家としては千代は大家であつたのであらう。大抵の江戸の俳人は千代女のゐた松任といふ小さい町に草鞋を脱いで、先づ彼女を訪ねて風流をもの語つたものであつたらしかつた。芭蕉のおくの細道の行脚時代にでも居合したら、芭蕉は縹緞のよくない彼女にでも親切に句法のことをべちやくちや喋つたかも知れないのである。

いそがしや董を摘ばつくつくし

園女

園女といふのは醫師の内室であつたが、芭蕉はこのひとのことを、「白菊や目に立てて見る塵もなし」とまでに、暗示した褒めやうをしてゐる。餘程清くかつちりと纏つた色白い美女であつたらし

い、醫師の奥さんといふものはみな美しいやうに、園女は芭蕉を感激させてゐる。一生獨身でゐた芭蕉は女人に對しては恐らく最後まで初々しい氣持を抱いてゐたに違ひない。

「いそがしや董を摘ばつくつくし」の句の讀口を見ても、性格に柔和な、豊かな子供らしい育ちのよい快活さがあつた。千代女と違つて句の數も尠く旨さも拙いが、先づ元祿俳壇の紅一點であることは疑へないのである。園女がゐなかつたら元祿俳壇は女氣なしで淋しいのである。

霜やけの手をふいてやる雪丸げ

羽紅

羽紅は元祿の大作者凡兆の妻で、凡兆が比類ない旨い發句を物してゐる間に、おぼえこんだ發句であるらしかつた。「木の股のあでやかなりし柳かな」白梅に灰捨てである垣根かな」の作者である凡兆は、芭蕉が時の天下に恐れるものは、只、この人ひとりであつた。凡兆が下獄しないで芭蕉といふ本能寺を火炎に包んで攻勢して天下を奪ふ者がゐたとしたら、それは去來や丈草や、また其角や嵐雪ではなかつた。それは明らかに大凡兆でなければならなかつた。醫師であつた凡兆は他人のかかり合で下獄し、羽紅が秀れた句をのこしたのである。

この句の内容を見ても、羽紅といふ女らしい、いたはり深い情愛が表はれてゐる。尼になつたくらゐであるから、或ひは子供がゐなかつたのかも知れない、凡兆の傳記も詳しくないから勿論羽紅のことともわからぬが、この夫婦は俳人の家庭には珍らしい程、悲劇を負うて暮してゐたやうである。

四 老一茶

うら門のひとりであく日永かな

一茶

僕はあまり一茶が好きでなかつた。どういふものか巫山戯てゐるやうな調子に乗つた彼の發句は、親しみ甲斐がないやうな氣がしてゐて、讀みかけては何時やめてゐた。去年あたりから又ぼつぼつ讀んで見て一茶の悲しみが解るやうな氣がし、信州人の複雑なねつちりした性格がにじんでゐて、輕はずみの發句も澤山あるが、よい句になると敵はないところに突きぬけ、それでゐてほかんとして投げ出した工合は、底知れずに澄んで響を持つてゐた。

一生涯に一萬句以上は作つてゐた一茶の句は大抵は駄作に近い、おそらく一茶は芭蕉や蕪村のやうに推敲するとか、句を練るとかいふことをしなかつたのであらう。一茶の句法から云つても推敲などしてゐたら、どれも捨てなければならなくなる。あとで見ると馬鹿馬鹿しい句が多いからだ。一茶自身でもこれでは困ると思つて次から次へと、句作を續けて行つて行つておち込んだものであらう。だが一たん書きのこした發句は一茶自身で捨ててゐても、あとから拾はれてしまふのだ。それに表現の上でちかちかに生活内容をあれだけ大膽率直にねり込んだ俳人は、殆ど一茶ひとりである。芭蕉の厭世主義、蕪村の濶達にくらべて見ても、一茶の陰惨な爪あとは表現派の惡魔の囁ひ

のやうに物すさまじく、天明後期の俳壇に掻き残されてゐる。教養のない野生の詩人が時の大名を皮肉り、自分の生活を輕蔑し、故郷を居づらく憎みながら悶えてゐるありさまが解るのだ。

さういふ一茶の腹はどうかすると、途方もない美しい目標のないところに何時の間にか、からりと抜けて出てゐる。悶えたあげくには、人間は無表情な顔をしてゐるときがあるものである。僕はさういふ一茶を見ると、やはり芭蕉、蕪村、一茶、子規とかぞへて來なければならんと思つてゐる。一茶をそつちのけにしてゐた僕は不幸な彼に濟まぬと思ふのであつた。

なく蛙溝の菜の花咲きにけり

一茶

またけふも逢ひそくなひぬ花の山

同

穀つぶしさくらの下にくらしけり

同

山吹や草にかくれてまたそよく

同

穀つぶしの句、一茶の罵り得た舌の鋭さが出てゐる。しかも美事に澁滞してゐない、老一茶の上と顔が少しもたるまずに峻烈に窓明りに浮いて見える。さういふ彼は丈伸びた垣根草のなかに、なよらかなにも咲いた山吹のいとしい花を見通してゐない。

「さびしさや花のなかなるあすならう」は芭蕉らしく、さびしさやと先づ云つてかかつてゐるのに較べて、一茶はそのままを口うつしに書いてゐるのである。芭蕉の技法は古今無雙であらうが、一

茶の無縫も今昔にくらべる作者がゐない程である。いまから見ても芭蕉の發明した形容詞は立派である。しかも一茶の言文一致の發句は誰がかかつても及ばなかつたものであつた。「麥などもぼちやぼちや肥て桃の花」僕の好色はかういふ一句のなかに容易に美しい田舎女を想像することが出来るくらゐである。

翻つて「うら門のひとりであく日永かな」に至つては、老一茶の全句のなかの傑作かも知れぬ。これは僕に有難いほどの名吟だと思ふてゐる。かういふ句を讀むと、春日遅々とした何とも云へぬ長閑さのなかに身心をよこたへることが出来るやうである。かういふ佳句になると發句のねらひどころに打當つてゐるところがあつて、新らしく更めて發句世界の美ごとさを信じて出来るのである。

蝶來るや何のしやうもない庵に

一茶

鶯や何しやうもない門に

同

一茶はまたかういふ一つの材料を持ち廻つて、同じい表現の中にそれぞれ違つたあぢはひを出す微妙さをこころえてゐる男でもあつた。

飯たかぬ朝も鶯鳴きにけり

子規

門しめに出て聞てゐる蛙かな

同

「飯たかぬ」の句の前書「草庵」と記されてゐて、鶯の長閑な聲に暢氣な一日の朝を叙してゐる。子規の臭みの出てゐない句である。一層澄んでゐるのは「門しめに出て」聽いてゐる蛙の聲である。家のなかにゐては聞えないくらゐの遠い啼聲であらう。子規の澄んだ句はさすがにと思はせる。この蛙の句のごときは秀でた句であつて、無理をせず、こぢつけないで鼻すちのとほつた素直さがある。多作の彼の句は屑も澤山あるかはり、佳いのは圖抜けた句がある。

子規の作句をよんでゆくと、明治中葉の風俗人情といふものが表はれてゐて、發句がそれぞれの時代を表現してゐるといふことが直ちに思はれる。西鶴や近松ばかりの文學が決して日本の風俗史をもつて語るものでなくて、宗因、芭蕉、蕪村、一茶、梅室、子規といふふうにならば彼らの俳句にある内容生活を透して見ると、時代の面相が剥き出されて來るのである。子規となると嘗て我々にあつた生活様式がよくあらはれて來て、若い昔をしのぶことができるのである。「門しめに出て」蛙を聞くといふ今日の都會生活は、もはや發句の中の生活であつて、却々に物めづらしい貴重な音楽になつてしまつたのである。

「鶯の湯殿のぞくや春の雨」をうたふた子規在世中は、根岸に近い御隱殿の森に梟はおろか、あるひは狐狸の聲がきこえたかも知れなかつた。子規は病中の快い日は人力車に乗つて上野の山内の春をたづね、淺草本所の空に漲る春の埃の黄ろさに都會の暮しの複雑なのに驚いたかも知れなかつ

た。勿論晝夜とない黄色船ひこらうせきの音響などは夢にも思はなかつたであらう。僕の十八九ころに子規はもう他界してゐた。

再び凡兆について

——凡兆と他の作家とを較べて——

落の葉をへだて、見るや道はたる

凡兆

落は広い美しい緑の葉をもつてゐるものである。この場合は何となく落の畑のやうに思はれる。畑でないまでも、むかし畑であつたやうな落の簇生したところで、あたりに人家はありながら庭の広い近隣つづきの裏町あたりの景色であらう。

落の葉には早や夕つゆが下りてゐる。そして螢のあかりが葉越しに消えたり明くなつたりすること、落の葉の緑の色さへ仄かに感じられる。どうも莖に近い何かの雑草にゐるやうに思はれる。螢はひかり乍ら歩いてゐる。——落といふものは広い葉をもちながら妙に女性的なやさしみを持つてゐて、螢との情景が一そうしつとりとあらはれてゐる。その夕つゆの冷さが掌に感じるやうである。

白雨に走り下るや竹の蟻

丈草

この句などは、夕立のありさまが、まるで眼の前に見えるやうである。蟻が驚いて走つて下るの

が今の世でも左うである。凡兆の句はこの句にくらべると、一そう、はつきりと好い手法を持つてゐることが解る。

砂川や夕がほのある屋根の上

凡兆

砂川は砂の多い、乾いてゐるところは白く、濕つてゐるところは飴色の、水戸口に近いやうなところであらう。砂は清楚な感じのするものであるが、一面さびしい趣の深いものである。その岸に町から離れた家が土手よりも低く建つてゐる。貧しい感じよりも、鄙びた感じが深い。贅澤では建てられぬ一種の荒涼の氣はあるが、野趣と風雅に富んでゐる。その屋根も栗板か茅葺で、庭さきの夕顔が日あたりの方へ蔓を伸し、屋根を覆うてゐる。そして夕顔がぼんやりと咲いてゐる。砂川の感じが夕顔によく似合ふてゐて、隙間がない。夏の夕涼みらしい句ひが夕顔のやうに句ふてゐる句である。

夕顔や白き鶏垣根より

其角

この其角の句にも野趣があり、村はづれの情景がうかがはれるが、夕顔の花の蒼白さに白い鶏を配したのは、いかにも派手な其角好みの句である。凡兆は幽遠に近い情趣をもつてゐるが其角の句は油繪のやうに清らかな畫趣を描き出してゐる。自分はこれらの句を比較しようとするのではないが、同じい句の心が時には斯様に隔たりを有つてゐることを珍らしく思ふのである。其角は一讀の

後にすぐ感じを取ることができるが、凡兆はさうはゆかぬ。そこに何かかすけさがあり、たゞすまひがある。さびしさは凡兆に沁みついてゐると云つた方が多い。

五月雨に家ふり捨ててなめくじり

凡兆

これはまだ凡兆が京都へ移住しない前の金澤で詠んだ句であらう。或は故郷金澤の景色を想ひ起した句であるかも知れぬ。

雨の多い金澤の町家では、予の記憶するだけでも、住み捨てた柱朽ちた家がある。借手もなく蝸牛やなめくじりの這ふのにまかしてゐる家がある。さういふ情景を詠んだ句である。陰氣な物ずこさを持つてゐて人生味のある句でもある。雨がけふも昨日もふりそいで、板戸も飴色にぬれ濕つてゐる、家の中は仄ぐらい、誰が住みすてたものであらうと近寄つて見ると、戸の走らぬ闕の上に銀灰色のあとを引いたなめくぢが一疋、動くともなく這ふてゐる。「家ふり捨て、なめくじり」と一息に詠んだところに、ものすごさが誇張されずに大きな物語になつてあらはれてゐる。

なめくじりといふのは、なめくぢで、りと引くのは加賀地方の方言らしいのである。この場合、なめくじりと五字でをさめたのは効果の上で、じつくりと落着いてはまつた感じである。

洗ひ屋の藍の濁りや五月雨

許六

この許六の句には美しさを現はさうとしたところがある。洗ひ屋は紺屋であらう、その溝川の濁りが五月雨に交つて流れてゐる氣もちであるが、情景に深みもなく浅い、そのあさあさしたところは捨てがたいが、好い句とは思はない。

ひめゆりやちよろ／＼川の岸に咲く

凡 兆

この句の素直さ優しさにくらべると、何とも云へず我等の心がそれに適かぬ日常を恥ぢるくらゐである。ひめゆりが小さい流れに咲いてゐるだけである。それを淡々しい筆つきで一刷ころみたところが好い。あとに何も書かずにあるのも好い。

草芝を出づる螢の羽音かな

丈 草

さすが丈草のかそけさが出てゐる。

丈草の句は晝の螢でないかとも思はれる。羽音はすこし無理ではあるが、ねらひが羽音にあるよりも道を歩いてゐて、ふいに立つたそれを云つたのである。あるひは夜で、羽音なぞしないものと思ふてゐた螢に存外羽音のあつた小さい幽な驚きを述べたものかも知れない。

木の下や夜の明けかかる百合の花

浪 化

浪化上人は、許六の所謂「浪化者専門主一如大僧正之連枝也」である。句意の據りどころ、景のとり入れ、感じ方も佳い。凡兆の淡素にくらべると甚だ技巧的であるが、予はこの句も好きである。

木の間を縫ふた夜あけのあかりに、百合の白いのが咲いて立つてゐる。すつきりと少しも汚れてゐない句で、作者の暮しや朝夕の程も偲ばれて床しい。これらの句のあとで、「ひめゆりやちよろちよろ川の岸に咲く」を口ずさんで見ても、すこしいや味がなく、すぢの正しさ、すつきりとした句がらが思ひやられるのは、凡兆の心のありどころが落着いてゐるからであらう。

せり上げて蒼をこぼす葵かな

凡 兆

葵の花は眞夏の暑い日に咲くもので、一本の花莖に數十の蕾をもち、下の方から咲き上るものである。かつと照り榮えた紅い花が順繰りに下からせり上げせり上げて開くものである。

せり上げて蒼をこぼすと詠んだのは、その建築的な旺んな花をうたつて餘裕をもたないところである。張り切り、強さ、壯麗さをふくんでゐて一步も引かない。發句としての背丈が一度伸びて又ぎゆつと引縮まり、葵かなと結んだところは、凜乎とした風采をもつてゐる。その句作の心の張り切つたところは胸を張つた人のやうである。立派さも類ひなく美しい。凡兆の句は少ないがその少ない作のうちで、この句なぞ新しさから云つても、今の人の句のやうである。

杉なりにせり上りたる田植かな

丈 草

山の中の杉の木のある段々畑である。ひとむらの杉の列があるごとに、田が一枚づつ峰の方へ高まり、高まるごとに田が狭くなつてゐる。暗い杉の木をぬふて田植の若い緑が芽えて見える。せり

上りたると云つたところに句の勢ひをうかがはせてゐる。一味の陰氣さはあるが、それとは別種の明るさをもつてゐる句である。丈草のよくねらふところである。さびしく明るく、さらにさびしく現はすところは、丈草ならではと思はれる。

凡兆は大がいの場合に景物にしつかり喰ひ入つてゐることは、葵の句で解るが、その他、「山寺の簀の子も青し冬がまへ」とか、「しぐるゝや黒木積む家の窓明り」とか、「灰捨てて白梅うるむ垣根かな」などに著しい。何とも云へぬうまみが名工の鏤刻のやうに繊く、類のないいみじさがあらはれてゐる。尋常一様の句作家に葵の句のごときものが、詠めるものではない。奥の奥、髓の髓、底の底から沁み出た清泉一滴のころづかひである。凡手の及ぶところではない。

渡りかけて藻の花のぞく流かな

凡 兆

小さい流れであらう。村落などにある小川に違ひない。——目高が列を亂して逃げたあと、さゝ濁りのした水が少しばかりの動きを見せてゐる。よく見ると青い藻の中に花が着いてゐて、その静かさは一入である。かういふ幽雅な境致である。

渡りかけてと云つたのは、二た足三足踏み込んだ小さい橋であらうが、これは或は素足で渡つたのではないかと思はれる。どちらでもよい。

藻の花や小舟寄せたる門の前

蕪 村

小舟をつないであるところの景で、流れはよどんでゐる。それが人家の門の前であるからには、何となく藻の花に雑つて埃や芥が捨てられてある人間の生活に近いさまが思ひやられる。渡りかけての凡兆には、何かまだ清さが流れにあるやうに思へるのである。一たい、藻の花は迅い流れにはすくないものである。

汐引て藻の花しほむ暑さかな

兒 竹

これは俳句の仕上りの手綺麗さが著しい。それに潮が引いて藻の花のしほむのが、哀れである。幽なほかない思ひを催させる句である。凡兆のは眼の前にありありと眺めてゐるのだが、これは手綺麗さはあつても、机上の作の感じが鋭い。しかし仲々棄てがたい句である。唯、暑さかなが利いてゐるやうに思へば思はれるが、わざとらしいと思へば故意とらしくも思はれる。しつかりと地についてゐない感じである。

この他、凡兆の夏の句だけでも、佳い句が多い。殆、一粒選りだと云つてもよい位である。凡兆は其素材や好みにも凝り屋であつたらしい。

日の暑さ盥の底の蟻かな

凡 兆

すゝしさや朝草門に荷ひ込

同

髪刺や一夜に錆びて五月雨

同

市中は物の匂ひや夏の月

凡 兆

川水や潮つき戻すほととぎす

同

題去來之鯉峨落柿舎

豆植る畑も木部屋も名所かな

同

「髮剃や一夜に錆びて五月雨」の句の如きは、鬱陶しい五月雨のところが、錆のやうにありありと、懶く感じられる。その間に走る一味の凄み鋭さ、考へ方の深さが今さらに凡手でないかれの力量の程が思ひやられるのである。

去來の落柿舎に題した、「豆植る畑も木部屋も名所かな」も、短冊にでも記されて残つてゐて、それが予の手にでもあつたら、予の喜びは一通りではない、——しかし不幸にしてまだ凡兆の短冊を見たことがないことを遺憾に思ふてゐる。その妻の羽紅も、女性らしい優しい句作を残してゐる。凡兆下獄の後も貞淑であつたらしく、羽紅尼と號して容色も千代女の如く醜くなかつたらしい。その羽紅といふ名前からして優しい女性を思はせるやうである。

丈草の句について

寢がへりの方になじむや蟋蟀

丈 草

寒けれど穴には啼かずきりぎりす

同

ひと睡りして眼をさました。肩のところ涼すぎるくらゐの、むしろうす寒さを感じる、夜具を肩のところに當てて見たが、夜はまだそれほど更けてゐないやうである。くるりと寢がへりをして未だ油の利いてゐる行燈の方に向いた。となりの間はすぐ勝手に、枕もとの雨戸のそとは露の深い夜寒の頃である。石の下にでもゐるのか夜更けになると益々冴えるきりぎりすのすだく聲が、しきりなしに啼いては止んで別の聲まで交つてゐる、——一體何正くらゐ鳴いてゐるのだらうと聲の變つてゐるのをあてにして讀んで見ても、入り亂れた聲は何正だか分らぬ。あゝいゝ聲だと思つた。寢入りばなはそれほどでもなかつたのと思ふ。

秋の夜半に誰でもこんな親しい氣もちのする晩はあるものである。そしてその事は何んでもないことではあるが、清夜聽蟲といふやうな古風な、實にも清々した心の温かい氣もちである。わたし

は嘗て市井の陋居にゐた頃、能くこんな蟲の音いろをきき分け、社會主義的な思想を自分から追ひ出したものであつた。いまは雜念を排するに努めると云つていい。丈草法師のこの句は全くしみじみとしてゐる。その他「寒けれど穴には啼かずきりぎりす」の句もいゝ境致を詠んでゐる。穴のまはりには夜の明りがさそひに来て、きりぎりすは既う宵の程に穴を出てしまつたのであらう。草の葉は夜のいろと同じい漂ひをしてゐる。しかも寒さはとくに過ぎたお彼岸のところからひと晩ごとに加はり、星や月のあかりも透つて美しく冴えてゐる。併し何となく嘘をさそふ寒さがきり／＼と雕み込まれてゐるやうな夜である。わたしはこの句も仲々うまいと思つた。「穴には啼かず」と云つたところに子供らしい禪氣がある。法師の心のほども窺はれていゝ。

鶏頭の晝をうつすやぬり枕

丈草

或る閑寂な庭に縁側のない座敷がある。庭には鶏頭が三四本立つてゐて、隣りの垣根から射す日ざしが當つてゐる。作者は晝寝からさめ一杯茶をのんで、睡り足りた氣もちで茫やりと庭を眺めてゐる。秋も一日づつ深み増りゆくやうな穩かな日和である。かれは下駄を引つけて庭へ出て見た。土はいゝほどにつやのない濕を帯び、ひる下りといふのに露のけはひさへ感じられた。

かれはふと座敷を見た。そこにぬり枕がうつすりと日ざしに赤い鶏頭の花を映して、何か深い趣きがこもつて見えた。先刻から睡つてゐるうちにもかうして鶏頭が映つてゐたのであらう。あまり

におあつらひ向きの景色ではないか作者はしばらくしみ／＼とその花に見とれてゐる。

うづくまる薬の下の寒さかな

丈草

「芭蕉翁の病床に侍りて」といふ前書がある。

芭蕉翁の病床に侍してゐるつれ／＼に師を慰めるため、木節、乙州、其角、支考、惟然などが句をものしたときの句である。「花屋日記」には、

「一々惟然、吟聲しければ、師、丈草が句を今一度と望みたまひて、丈草出来されたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白しと、しは噺れし聲もて讚めたまひけり。」

と書いてある。つね／＼芭蕉も丈草にはそのさびしをりには深く心をとめてゐたものと見える。

しかも芭蕉が屬贖につく四五日前のことである。小説家芥川龍之介君の「枯野抄」には丈草が芭蕉臨終の際の姿を叙して、かう書いてゐる。

羽根揚子はその後にゐた丈草の手へわたされた。日頃から老實な彼が、つましく伏目になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら靜かに師匠の唇を沾してゐる姿は、恐らく誰の眼にも嚴だつたのに相違ない。……

後略

……あの老實な禪客の丈草が、芭蕉の呼吸のかすかなるに従つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで来るのを感じた。悲しみは元より説明を費すまでもない、がその

安らかな心もちは恰も明方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやうな、不思議に朗らかな心もちである。……後略

これは丈草を描くために丈草の心もちに入り込んだ、龍之介君の穩かな描寫である。わたしもこれと同じ心を感じるのである。恐らく蕉門ではこの人が一番落ちついてゐたであらう。

藥焚けば灰によごるゝ龜馬かな

丈草

秋も深くなつたので障子を外して置いたのを閉め、簀戸を納屋に移した。そして一冬の藁を焚かねばならぬ。それ故、毎朝一束づゝの藁を焚いては火桶に配ることにした。そのころのうそ寒さを慕ふて来るのか、いとゞは、竈の下や外かゞりや、そこらに積んである冬瓜の下にもぐ込りんでは、夜はほろ／＼と啼いてゐる。この二三日その聲さへ低うなつたやうに覺える。しかも今も飛び出したいとゞはからだに灰をあびてゐる。毎朝藁を焚いてゐる故だと思ふ。あはれ深い句がらである。これくらゐ幅と丈と深さとがどつしりと肉づいてゐる句は、たうてい今ごろの人には吟めない。禪僧といふものはそれらしい臭みを持つてゐるものだが、丈草にはそれが毛頭ない、めでたき限りである。

北枝の發句

山吹やこぼれて泥に上かはき

北枝

居りかはる羽音涼しや枝の蟬

同

蟲ぼしや幕をふるへばさくら花

同

さすがに北方の逸士と云はれただけのもを持つてゐる。「居りかはる羽音涼しや枝の蟬」のごときは二百年の間、唧々として紙魚の食つた寫本の間に夏をささやいてゐる蟬である。「居りかはる」と出たところや、その新しさは我ら後人もなほ學びえざるところである。「居眠辯」に記して「世にいふ翠臺の北枝は、萬事ねむるにたへたりと、花にそむき眠るにはあらず、月にそむきて眠るにもあらず、月に對して覺るにもあらず、唯よくどこでも眠るなり」と酔北枝は云つてゐる。しかし「蟲ぼしや幕をふるへばさくら花」のごときは、作者自身はあどけなく詠じ過ぎたものであらうが、夏の日、蟲干しの折のさくらの花びらを見ることは、秋にも増してあはれにさびしいものである。しかし此の「さくら花」の句は北枝の句でないことは明かであるが、しかし此處で疑義を挿んで置く。

北枝の句でないにしても仲々好い句であることは否まれぬ。それらの句で見ると、我が北枝の眼光は仲々幽遠の境を睥睨して餘すところ無いやうである。

有明や光おさまる桃の花

池の星またはらはらと時雨かな

北枝
同

許六の作者列傳に據ると、「北枝者。加州金澤人也。業磨工。見蕉翁好風雅。北方逸士也。」と云ひ、蕉門十哲の一人に數へてゐる。

一茶の發句

みぞ萩や水につければ風の吹

一茶

旅日記の中のこの句は珍らしく静で、あちはひ深い。みぞ萩といふのは普通の萩よりかたけの低い些細な流れなどに生えてゐるものである。溝萩のことであらう、そと歩きをして一叢のみぞ萩を折つて家苞にし、それを手桶に挿し水を吸はせた。或はほどよい霧を吹いたかも知れない、ともあれ、凋れかゝつたみぞ萩に一脈の生氣がのぼつたと見え、花のいろも氣のせみか冴えてりんとした。野にある花はしをれやすいものであるが、ようも斯様に呼吸を吹き返してくれた。氣がつくと勝手の戸が開いたまゝ北南の風が爽かに入つて来て、この可憐の花をうごかしてゐる。

句の意味はこれだけであるが、いかにも味ひに生きたところが深く、花の氣もちをえぐり出してゐる。一茶としては珍らしくいゝ句である。わたしはあまり性格的な一茶の句は好きではない。却つて沈み込んだときの一茶に幽寂を感じることを一茶のためにも、且つ私の好きを漁るためにも採るのである。

鶴下りて一倍寒きのぎくかな

一茶

肌さむい朝冷が深くなるころである。

野原に出ると下葉の枯れた野菊が咲いてゐる。莖がよほど骨立たしく硬くなつてゐるので、折りながらも今更らしく秋深いことが感じられる——するとふと目についたのは白い一羽の鶴が下りてくる姿である。雪のやうに白い、鋭いくらゐの感じである。しみじみと眺めてゐるうち、むしろ冬近いやうな気がして来た。遠山には雪のひかりが潜んで暗鬱な景色といふより、どこか透明な風景である。「鶴下りて一倍寒きのぎくかな」——どこか玲瓏とした氣品さへ帯びてゐる。

この句は文化元年の作で、そのころ鶴がかなり日本に來たものらしかつた。一茶は實際にこんな景色を見たかどうかは予の與り知らないところであるが、机上の發句としても或る凛とした氣品をもつてゐることは、けなげにもめでたいことである。「きりぎりす隣にゐても聞えけり」の句は一茶の洒落の風致をほのかに優しく覗かした寫生句である。句は讀んで字のごとき意味ではあるがいかにもきりぎりすらしい句で私は好きである。單なる發句といふものを平俗に解釋しても、この句などは普通の讀者にもよくわかるやうな氣がする。

夕月や流れ残りのきりぎりす

一茶

洪水の時の句である。

陰惨な出水のあとの雜草が泥にまみれて、地に伏してゐる。中には頭を擡げた穂のある草などに、ところどころの泥水の溜つたところがある。人の氣を沈ませるやうな夢月が早上つてゐるが、まだ宵浅いきりぎりすが彼處此處に淋しく間斷を置いて啼いてゐる。こんな景色をながめると人々はも一度出水のおそろしかつたことを思ひ出す。それにしても夕月のすつきりした色はどうであらう。まるで何事もなかつたやうに穩かに澄んでゐる。いま啼いてゐるきりぎりすも大方流れ残つた木の上か、丈高い草の上でなければ人家にでも匿れてゐたのであらう、何ともいへないしをらしい聲を立てゝゐる。

思ふに夕月といふからには、宵浅いころであらう、しかし句の姿からいふと何となく更けてゐるやうな鼠色の暗が思ひ出されてならない。

あさぢふや茶好になりて朝寒き

一茶

朝寒くなると火のそばに坐るのが楽しくなる。夏の間から火に遠のいてゐた氣もちが、四五日前から沁々と爐のそばを戀ふてゐる。そして湯を沸して茶を淹れて朝ごとに飲む。あまい澁い煎茶の濃いのが起き出たからだに、えもいはれず爽ばりと美しい氣もちにならせる。家のものもまた友だちなども茶好きである。自分もたうとう茶好きになつたやうである。霜にはまだまだ間があるが朝ごとの寒さは時にびりつとくるやうである。素足の冷えはきのふよりもひどいやうな氣がしてく

る。あさぢふも頭も垂れるほど露をふくんでゐて、下葉は落ちつくしてゐる、哀れを感じてならぬ。一茶は貧乏だつたからなほ一杯の茶も、その用意のあつたときには戴くやうな氣もちで飲んだのであらう。貧しいものは些細なものにも複雑な感情で嬉しがるものである。江戸にゐたころの彼はひどく貧乏してゐたから、朝ごとの喫茶さへ一茶には美しいよろこびであつたにちがひない。——こゝにあさぢふを加へ點したことも、並々ならぬ秋の深さを思はせる。すこしも濁らないすつきりした朝の心をそのままうつし出したものである。

小櫻にかれのの雨のかかる也

一茶

町はづれの家でなければ、座敷からすぐ野に出られるやうな家である。風は吹きつけてゆく、そのたびにざら／＼と砂埃を感じるのだが、秋が開けてから砂ほこりはない、だが時とすると障子のすき間から、あまりに荒涼とした野の姿が見えるので、さむしさは一入である。

けふも折あしく雨がふりそいで、風がないのに座敷の中へ吹き込んできてならぬ。障子を閉めてから氣がつくと襖がしつとりとぬれてゐる。いまさらに野の枯れたありさまが蕭條として目につつてくる。

野はかれて何ぞ喰たき庵かな

一茶

厠へ立つとか庭へ出るほかは滅多に縁側へさへ出なくなり、野の眺めは甚だしく蕭條としてゐる。

子供らの遊ぶ聲さへあまりしなくなつた。朝も夕方もいつも同じやうな穏さ、静さはあるが、その中に雲が起つて見えるやうな荒涼さが佇んでゐる。四五日前に降つた雨で水溜りができてゐて、枯れ草がその上に垂れ込んだまゝ、澄んで森乎としてゐる。——作者はさういふところに庵をむすんでゐるのだ。そしてさういふ光景にびつたりと目を据ゑ寂しがつてゐるのである。

時間でいへば晝すぎの三時ころであらう、作者は何か食べたい心をもつてゐた。何となく腹が空いてゐるやうな思ひがしてきたのである。しかし一茶の庵にはさういふときに取つて置くやうな茶菓子の用意があらう筈がない。

「何か食べたいものだ。」

それは口淋しいばかりでなく、もう少し腹淋しく空いた心である。さういふ空腹の念ひに枯野を配したところに、骨身にひやく一茶があつた。かれの發句が予に響いた。野は枯れてと出て何ぞ喰ひたき庵かなと靜かに閑やかなすなほさを現はしたところに、「故郷は蠅まで人をさしにけり」などと皮肉るよりも、もつと親しさが予には感じられた。同じやうな句に、「木がらしや口淋しいとゆふべかな」といふのはあるが、たうてい比較にならないくらゐに、枯野の句の方がよい。

木がらしや小溝にけふる竹火箸

一茶

物すごいやうな句である。

朝であるか夕方であるかわからない。

竹火箸は火桶にさしたものではなく、おそらく竈に用ひたものであらう。いつもの火箸が見えなくて、竹で火箸のかはりをつとめさしたもので、さういふ意味なれば朝のやうであるが、一茶のやうな不規律な生活をしてゐては、夕方に飯を焚くことが間々あつたであらう。不時の収入などからよく自炊にはさういふことがあるものである。一茶の場合もこんな時ではなかつたか？

その飯を焚くのに炭を用ひてゐたことは否まれない、一人者ではいまもむかしも薪の要はない筈である。七輪で炭を起して竹の火箸を用ひたが、そのうち竹火箸に火が移つて燃えた。そして慌てて一茶は小溝のわきへつツ立てた。一抹のけむりが上つてゐる——そこへ朝からの木枯しが物すごく落葉を吹きつけては、幾度となく過ぎ去つた。一茶はぼんやりそれを眺めてゐる。何となくかれが暮しに憔悴れてゐる顔容が見えてくるやうである。つまり生活の中身を剥ぎ立てたやうな句であるが、發句だけに物すごさが一段と深く感じられる。

この句などから考へると、一茶は小説をかける人であつたらう。すくなくとも自分だけのものを書き抜ける異才をもつてゐたことは、「ふるさとやよるもさはるも茨の花」の一句にも充分に窺ひ知られるではないか、この句には中々寂しさが籠つてゐる。まづ芭蕉以後の俳人で小説をかける腕をもつてゐたのはこの一茶よりほかにはなかつたらう、それもかなり新しく吾々に近い暮しを生活

してゐたからである。

降雪もはりあひなれや葉竹賣

朝からの雪である。

一茶

竹賣りが一人、道の遠くから歩いて来る、その他には人通りすらなく、何となく蕭條としてゐる。近づいて来るのを見ると、竹の束のさきにはまだ青いふさ／＼した笹の葉がついて、それにも雪がまみれてゐる。美しさは一入である。

行きすぎるのを見送つてゐると、いかにも風流げに見える。これを楽しんでゐるやうに思はれる。雪は小やみもなく降り竹の青さはだん／＼に遠のいてゆく。見てゐるとさびしくなる。楽しんで賣つてゐるやうに見えるが、まことはさうではないのであらう。——唯、葉竹賣としてゐるのは、わたしの考へでは葉が竹のさきについてゐるだけで、他にべつに深い意味があるのではなからうと思つてゐる。それとも何か他に意味があるのかも知れない、知厚の垂教を乞ふ次第である。

夜半翁

冬の日には四季を通じて閑寂な心もちがする。賣文の忙しい閑暇をぬすんで折々俳書などを讀むが、冬の夜などふさはしく楽しみである。

この頃蕪村全集を讀んで、一代の大才蕪村翁が自分の娘を嫁入りさせて安心をしたり、先方の家風をいやしんで又取戻したりしてゐるところで、自分は老いては子を思ふ親を有難くさへ思ひ、小説などを讀んでも感じない不覺の涙をさへ感じた。蕪村の娘は手のいたむ病氣に悩まされてゐた。あるひは神経痛かロウマチのやうな疾患かも知れない。ともあれ、さういふ病氣の娘をいたはり婚家から取り戻してから、臨終の枕邊にまで近々と一緒に暮してゐたが、その心は豪邁不羈の蕪村にもあるまじい深い愛し様であつた。人としてかれが世の常人であつたことは誠に好ましいところである。自分は蕪村の句に最もなじまなければならぬとおもふた。芭蕉のさびはなくとも、何か大木の肌に蒼々と蒸しついた苔の壯大をおもふた。

芭蕉は心境の澄むに従つて柔和な顔つきで、いつも平淡に澄んでゐたらうが、蕪村はどこかはぢ

きれ心をもつてゐたらうとおもへる。世上の應酬をも取入れ風雅の道も怠らなかつた蕪村は、何も彼も黙つて見てゐた蕉翁とは、人間らしく會へばくさみを感じたらうが、しかし大幹を交へる雨日の老樹であつたにちがひない。

きりぎりす自在をのぼる夜寒かな

蕪村

鮎落ちていよ／＼高き尾上かな

同

この句の正しい解釋よりも、かれ蕪村がそこに心を置いた落着きが尾上の瘠せた山肌の巍峨たることを思はせる。自在をのぼるは單なる一匹のきりぎりすではなく、肌寒い夜半翁の心の中から出た一匹でなければならぬ。ほの暗い行燈の下に坐した夜半翁は、夜の獅子のやうな靜さで、半眼をひらいて、かすかに耳をうごかしてゐる。――

灯ともせといひつゝ出るや秋のくれ

蕪村

門を出て故人にあひぬ秋のくれ

同

その道を歩いてゆく姿が眼に見えるやうである。寂寞をしつかりとつかんでゐて、離さないところに羊腸たる夜半翁の道がある。

この道や行く人なしに秋の暮

芭蕉

こがらしの地にも落さぬ時雨かな

去來

松風の里は靱するしぐれかな

嵐雪

かれらが同時に物の底に手を觸れてゐることは、既に一家の重い心を建てゝゐることである。岩壁のやうに抜くことのできない聳立を持つてゐる。

水仙の香やこぼれても雪の上

千代

この可憐な千代尼のこゝろも矢張、たけはちぢまりながらも、眞諦に入つてゐるものと思はねばならぬ。そのほのかさの中に濶然として曠けてゐる一代の心がある。

寂寞は蜘蛛の巢のやうなもので拂へども盡きない、また眼にふれるものではない。わけて夜半翁は結局一代の才の終りかけたころには、もうこの蜘蛛の巢をしつかりと見て、手に觸れてゐた。壯麗大機の中に老いてゆく美しさは、夜半翁の生涯にあつた。しかも蕭條の風物にひそむものを取まとめる幽遠をも、又世帯人情の中に思ひをひそませるものをも同時に持つてゐた。

こがらしや島の小石眼に見ゆる

蕪村

初霜やわづらう鶴を遠く見る

同

うぐひすの竹に來初めししぐれかな

同

葱さげて枯木の中をかへりけり

同

冬の梅きのふや散りぬ石の上

同

勝手まで誰か妻子ぞ多ごもり

蕪村

畫併に放浪したかれの句に繪ごゝろを含んでゐた。

きりぎりす自在をのぼる夜寒かな

蕪村

は、決して畫併の種類に落ちたものでなく、念々止まざる夜半翁の時に魂の息づかひとなつて現れたものである。かれが怪狸に筆硯を染たことはともかく、その「きりぎりす」だけは霜鋭い嚴冬にもなほかれが座右に飛んだものと思はねばならぬ。

千代尼

毎日のしぐれや雲にふりこめられ、障子もうすぐらく心寂しく、出でて歩かんにはや寒さきびしき頃なり。せん方なく千代尼の句集など拾ひ読みせるなかに、水仙の香やこぼれても雪の上、といふのあり。何となくこゝろ惹かるる句なり。

多枯やひとり牡丹のあたたまり

千代

朝の日の裾にとどかぬ寒さかな

同

はつゆきは松のしづくに残りけり

同

千代尼は加賀松任なる聖興寺に墓碑ありけり。松任は金澤を離ること二里、北加賀に位する古めかしき一小寒驛にして、名物あところ餅を喫し千代尼の墓をたづぬる雅人いままほ絶えず。老梅亭亭たる聖興寺の境内にそゞく時雨のあめあしを思へば、縹緞よからざりし千代尼の、その醜かりしため俳道たくみに風流すぐれたること自ら思はるゝなり。享保五年四月十九にして尾山城下、(今の金澤)の足輕福岡彌一に嫁しけるが、そのをりの、濫かろか知らねど柿の初ちぎり、と自ら謙遜し

つゝ夫に見えしところ、己れもよくよくみにくかりしことを氣にせしなるべし。七年の後夫に別れ、翌年一人しかあらざりし彌市を失ふに至りぬ。

破る子のなくて障子の寒さかな

千代

この句まことに予が好めるの句なり。予の千萬言を冗あだにせし小説も亦この一句に及ばざるがごとし。異才あり百合を描くに秀でたりと。萬曆の支那に蘭をゑがくに柔しき異才をもてる馬守眞あり、何か相似たるこゝちす。千代尼は世才とも秀でたる俗雅人なるべく、馬守眞亦それに相較べ得るがごとし。たゞ千代尼は美しからず、馬守眞は艶豔たる妝ひをもてるがごとく思はる。俾して時雨と雲の松任在に赴き、すなはち此の一文爲る所以なり。

涼扇句抄

涼み居て闇に髪干す女かな

召 波

下町あたりのまだ宵浅いところである。納涼臺が出てゐてそこに煙草盆があり、蚊遣のけむりが縷縷として上つてゐる。二三人が何か浮世話をしてゐる。通りにはちらほらと人通りがあるくらゐで、うら小路のやうなところですこしばかりの空地で二三本の立木くらゐあるらしい。或は紺屋の干場になつてゐるかも知れない空地である。車井戸を誰かゞ上げる音がしてゐる。

作者はそこを通りがかりに或は道をたづねたのかも知れぬ。涼み臺の人ごゑのする方へ行かうと思ひながら、小路の角をまがらうとすると、柳か何かの立木があり、そこに床几を据ゑて坐つてゐる女があつた。道をたづねるものですがと云つて、宵浅いとはいひながら充分に熟した闇の中に、くつきりと浮いた眞白い女の顔を見た。女は、その道はしか／＼の道でございませと云つて教へてくれた。どうも濟みませんと云つて最う一度女のかほを見返すと、女の髪の毛がくろぐろと艶やかにうしろへ垂れてゐた。夕方早めに洗つたのであらう、まだ糊の匂ひさへしてゐた。そればかりで

はない、女は風のくる道に向いて髪を乾かしてゐるやうである。手にある團扇も髪をうしろへなびかせては、背中であふいでゐるやうである。

二三間行きすぎてからも女の物靜かで、どうやら凄艶に近い顔立ちが目にかんできて、振りかへつて見ると灰白い藍手の浴衣地が見えるばかりだつた。闇の重つたあたりにはもう顔立ちが判らなかつた。何となく心惹かれるやうな夕景、そして妙に洗髪が強くあたまたに残つてゐる。

作者はおそらく途上でさういふ髪干す女を見たものにちがひなからう。闇に髪干すが荒彫りでよく感じが出てゐる。涼居てと物靜かな出方もよい。「涼居て闇に髪干す女かな」と、もう一度口で云つて見て何か夏の夜のかくれた魂を掘りあてたやうな莊嚴を感じさせる句である。

川ばたにあたま刺合ふ涼みかな

楚 常

もう螢の季節もすぎたのである。螢に騒ぐ子供もゐない川端は、二三日前の雨で一層きれいに澄んだ流れになつて、底の砂利さへ美しく透いてゐる。浅いせゝらぎの風情である。そこに石の段々がある。その石の上に踞んで月代を刺つてゐるのが八百屋の小者である。まだ夕方と云つても暗くなるのに間のある永い夏の日のくれで、石の上に立てかけた鏡にうつる蝙蝠のかけも濃く、空は明るいところである。そんなに廣くない川面であるが、吹く風はひやひやと涼しくほれほれするいゝ風である。

そこへ經師屋の小者がくる。剃刀は空いてゐるが剃らぬかといふ。では剃り合つて見ようと答へる。かれらは段々の上で黙つて剃りはじめる。そこへ又誰かゞ來合せる。また剃合ふことになる。

——この川すぢの家並の人たちはみな川べりへ出て涼むのである。そして口々に剃る人と剃られる人をからかふ。そんなにきれいに身じまひをして誰に見せようとするのだといふ。みんなは笑ふ。しかし永い日のくれはまだ剃刀の刃を見分けることができる。

剃られた青いあたまの男はまた川べりの床几の上に戻つて、何か話し合つてゐる。田舎めいた夏の日のありさまが楽しく目にうかぶ。或はこれはどこかの山の坊で、坊主らが剃り合ふのではないかとも思つて見た。坊主だとすれば川もどこか山寺あたりで一段と田舎めいて考へられる。剃り合ふといふ感じは坊主にはいかにも相應はしく想像されるが、しかし剃り合ふことがよくあるから、町の人々が剃り合ふたとして考へた方がいゝだらう。

穿きながら草履を洗ふ清水かな

北 枝

草いきれのした野路を歩いて來て足の疲れを感じた。孰方を向いても暑い、青田の上に日が照りつけてゐる間に、あちこちに森や林がこんもりと茂つてゐる。しかたなしにまた歩き出した。何度も畦の小川音を聞いたが喉の乾きを醫すべくもない……。

とある社頭の森かけへ來たときに、そこに美しい清水が滾々と湧いてゐるのを見出した。ほつと

してその冷たい清水を掬んで喉をうるほした。冷たい野の水の味が耐らなくうまかつた。かれはもう一杯それを飲んで、涼しいすこしうす暗い社頭の景色につかれた目を移した。蟬のこゑが夏の眞盛らしく木の頂の遠くに啼いて、それさへ一段と涼しげである。かれはその時或る誘惑を感じた。埃で白い草履の上に乗つてゐる自分の足を、そつくりこの清水に浸したら、さぞいゝ氣もちだらうと思つた。しかしそれは俗人のすることのやうで氣はさしたが、湧いて流れてゆく清水を目に入れてゐると、たとへ足を浸してもすぐに清水の濁りは澄んでゆくであらうと考へた。

かれは思ひ切つて草履のまゝ、その清水に足をひたした。かれは草履をぬいで這入るつもりではあつたが、瞬間の、不圖した氣もちからそのまゝ浸つたのである。疲れと暑さでくるしんだ足は呼吸を吹き返したやうに冷たさ新鮮さが沁みこんで、頭脳まではつきりするやうに思へた。かれは平常から足といふものゝ幸福さを考へてやらなかつたことを思ひ出して、いま涼しく喜んでゐる足の仕合せを興深く覺えた。玉砂利が足の甲の上に觸れては流れた。

作者は「草履を洗ふ」と云つてゐるが、それよりも隠れた氣もちを自分は採るやうにした。功利的な「草履を洗ふ」氣もちの内側にひそかな作者の句意があるのだらうと考へても見たからである。

網打の見えずなり行く涼みかな

蕪 村

川べりの石垣の上に腰かけて涼んでみると、山瀬といふ涼しい風が吹き下りて来た。川はかなり大きい流れで鮎などがゐる川だ。ふと気がつくと同様に人かげがしてゐるが、暗くてよく見えない、——しばらくすると瀬の上に網を投げる音がした。やはり今の人かげは夜網を打つ人らしい。よく見るとその人は瀬の上の網の下手にかゝんで、鮎を透して網の目を見てゐる。幾尾かをつかまへたらしい。

涼んでゐる人は何か聲をかけようとしたが、瀬の音に洗はれてしまつて返事がなかつた。そればかりではない、夜目にも白い礫の渚づたひにその人のかげが次第に遠のいて行くやうである。たゞ投網のざんぶりと水にはまる音だけが折々瀬の音よりも一そう涼しくきこえるばかりであつた。そしてこれらの情景は單に暗いと云つてもほんのりした星あかりの漂ふたほの暗さである。石の白い川原のほとりに見える人かげが、さながら浮ぶやうな句である。

水扇

夏の飲みもの食ひものにさまざまあるべし。

晝顔の果も見えけりところてん

清瀧の水汲みよせてところてん

許 六

芭 蕉

されど紅塵裡水道に冷したるところてんの色いたづらに磨り硝子のごとかれど、夏日暑さを鎖するの料にはあらず。

アイスクリームに添へたる短冊形のせんべいのあるは、大方の諸君子の知るところなるべし。されどあれは何のために添へられるかを知らざる人多かるべしと云へる友は、まづ短冊形のせんべいに盛りたるアイスクリームを裏返しにして、口中上あごにぢかに冷たきをあてざるためなりと云ひぬ。ことの眞偽は知らず、故あることかなと思ひぬ。

碓氷山上、碓氷村に碓氷川の源泉あり。冷たき泉のふくれて湧き盡くることなし。予、その泉を掬ひ味ひけるが信越線熊の平の水よりも數等つめたく、水くは手を浸すことあたはず、美しさ心神を透明になす。到底輕井澤の水と較ぶべきものにあらず。

されど輕井澤の水も冷くて洗面に耐へざるものあり、予、ひと夏をここに暮して歸京するとき、つねに魔法壺の中に一杯ををさめ、東京に持ち歸りて家族にすすめしことあり。今夏、ひそかに思ふらくは此の高原の水を沸かしめ茶を入れんには、一そう山水の味沁み徹りて茶の味天外のものあるべしと。

水飯や藤捲いたる日の夕

紅葉

紅葉の句は派手にて好まざれど、その句意また後世をたのむべきものなり。水飯とは夕方どき清水をもて洗ひ濯ぎ、飯一粒づつの芯に冷たさ沁みたるころ、清き漬物にて食すべきものなり。むしろ盛夏のころより、ころもち秋近く暑さ仲々に烈しきとき、一夕の水飯の心、哀しとはなして食すべきなり。

瓜は郷里にてみ、のうりと云ふ。

山の茶店、海近きところの茶店、それらの掘抜き井戸に五つ六つ浮べて冷したるありさまの、仲

仲に俳味の姿あり。行商人ら集ひその肌を庖刀あつるを見れば、古き木版畫の景色さながらの、川楊のかなたに一帆おもむろに過ぐるを見るなるべし。東京の瓜は白かれど郷里にては黄色の肌に縞のすぢ走り、大きさと握りのあまりあり、子規の「瓜二つ重たさうなる禿かな」といへる句の、ころまたなしとせず。されば郷里の童子らのその瓜のおもてに、眉目鼻を描き、みのうりちやうちんとはなすなり。または梅雨明けの夕方には泳ぎ遊ぶ子供のために、その生れ年月を書き、すつぽんに命とられぬやうにまじなひするため、大川に供養流しを敢てするなり。

朝露によごれて涼し瓜の泥

芭蕉

瓜の句、さまざまに讀みふけりしが、この句ほどすがすがしきものはなし。これ、いまの人の句のやうに新しきなり、誰か二百年前の瓜と思ふものぞ。芭蕉はものの奥や深さに手をさぐり入れて、あたらしきものをつかむ人なり。この人の狙ひのていねいに落着きたるありさま、感嘆の外なし。その他瓜の句の、わが好みをあぐれば左の二三なるべし。

旅人の枕に瓜の匂ひかな

瓜喰に松蔭せまき日なたかな

葉がくれをこけ出て瓜の暑さかな

大垣は夜明になりぬ眞桑瓜

浪化

李下

去來

眠石

夏に氷あり、氷室といへるものあり。享保版「江戸砂子」によれば、「六月朔日、氷室の祝、賜氷節と云、おほやけに氷を召す事あり、それにしたがひて地下にも氷餅、又、かき餅やうのものを食す。」とあり。いまの世の姿うつりて人造氷とて機械にてつくるなり。その氷の縁起に曰く、

「仁徳天皇六十二年五月に額田大中彦皇子鬪鶏といふ所にかりに出給て山に上り、野中を見やり給ひしかば廣き庵を作りたるやうなる所あり、人をつかはして見せたまふに窟なりと申、そのときこの山のあたりに侍る人をめして問せ給ふに氷室なりと申、皇子その氷をいかやうにして納るぞと問せ給ふ、こたへて申さく、土を一丈あまりほりて草をその上にふき、蘆荳などをあつめしきて氷をおさむればいかやうなる大旱にもとけず、これをとりて熱月に用ゆるとなん、其時皇子此氷を仁徳帝へ奉らせ給ひければ叡感ありよし日本紀に見えたり、是氷を奉りし始めなり、これより國々所々に氷室をおかれけるなり。近きは丹波の奥山に氷室ありけるよし、又、富士山伯耆の大山などにもありしなり。」

「氷室守龍に巻れしはなしかな」これは曉臺の句にして詰らぬやうなれど、龍に巻れしは何となく氷室の感じあり。

くず餅、涼しけれど好まず。

粽は笹の葉につつまれ、新しげなれど腹はりて好まず。されど春に於ける草餅の優しきに似て、何となく好ましき俳味を帯びたるものなり。

相知れる女の塔澤に入て文こしたるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ

鹽そへて草の香淺き粽かな

其角
尙白

句境は自ら愛すべき粽の風雅をよみ得たるものなるべし。粽に似たるものにて土用餅といへるものが郷里にあるが、むしろ涼しからざるもの如し、紅せるささげ豆を餅のそと側につけたるもの、盛夏、腹のちから弱りたるとき食して力餅とは稱ふ也。

夏の日、東京の町にあま酒賣の呼びありけるは、予のごとき田舎ものその風雅知るによしなきことなり。あま酒すすりて甘美しといへるは誰が子ぞ。

予のこのごろつくづく思ふはラムネの流行廢れしことこれなり。そのかみ我ら幼き時、いかにハイカラにして高貴なる飲料なりしか？ いまは場末や活動館内にて折々呼賣りせるをながめ、時代の高尚をこそ悲しくまた當然とは思ひぬ。ラムネの玉ほしさに憧れたるは予のみにあるまじ。

予の一年餘り滯郷中に食べたる鮎の數知るべからず、鮎のわ^たた^た苦きは山川の味、徹りて一片の花
瓣を嚼みたるがやうなり。

鮎くれてよらで過行夜半の門

蕪村

宵淺きほどに上流に夜網打てる知り合ひの、門邊を過ぎて五六が程頰ち行きしをよみしものなら
ん。田舎の暮しにはこのやうなること屢々あるなり。蕪村の鮎の句の新鮮なること、芭蕉の瓜の句
とともに三誦すべし。鮎の最もあたらしきはいまだなれず、からだぐなぐな也。すこし時經ちてび
んと反りを打ち、ぬらぬらのおぶらのやうなるもの肌につけるは、あちはひ新しきなり、それより
時經ちてぐなぐなになるは最早なれたるあとにて、市上一片落葉のごとき鮎なり。

鮎のさしみはあまりに非道なる食ひものなり、鮎は焼き或はつゆとなすべし、山川のおとめごを
さしみにして啖ふは何人の風流なる。——予、郷里の門前を走る流れに鮎を生簀に入れ、夕されば
自ら石垣を下りて料理るがほど、生簀の中よりつかまへ夕膳にしたゝめぬ。數すくなくなりしほど
に漁師きたりて生簀を充せり。いま都にありて色黄なる鮎だまたま焼きくらひて、予が故郷をこそ
思ひ慕ふなれ。色黄なる鮎の味ひ夕方のが庵に坐して思へば、まことに「鮎くれてよらで過行夜
半の門」べにあらす、こよひは細き月さへなく、茫たる都門の熱したる風のすぐるのみなり。

西瓜畑の夜半すぎで圓らかなる西瓜の肌手さぐりあてるはそも何たる悲しさぞと云へる人あり
き。この言葉西瓜くらふごとに思ひ出され微笑まるるなり。なにゆるかを知らず。西瓜は石をもて
割りたるは味すぐれたりとなん。

はるさめ草

けふは朝からの雨である。

若葉に風さへ加はり雨の音が春雨らしくもなく、あらあらしく降り注いでゐる。こんな日は俳句でも読んでゐるに恰度よいと思つて楽しみながら一つ一つ句に自分の考へを加へて見ることにした。

ゆきとけや深山曇を鳴く鳥

曉 臺

雪解頃の或る霞のかゝつた鬱然たる山河の風色である。残雪が齒のやうに皓い。それに何か暖かい氣もちが山と山との間に漂ふてゐる。茫々たる春色である。だがまだ樹は冬枯れのまゝの立姿だ。鳥が高い屋根の上から急に立つて啼いた。冬の時分はもつとゐた鳥が數少なくなり、その不吉な、くろぐろした姿も何だか春めいてゐる。近い山と遠い山との間にかゝつてゐる鬱然たる曇色をつんざいて、寂しく啞々として啼き立つてゐる。――

自分はこの句を味ふと、すぐ加賀國の連峰を想起した。ちらちらした底光りを含んで、何か眩し

い感じを鋭く封じた雪解頃の曇つた風色が、すぐわたしの眼前に描かれた。おそらく曉臺は寒國の景色を詠んだものであらう。

花の雨鯛に鹽するゆふべかな

仙 北

この句の意味は、花に招んだ客が來なくなつたのか、それとも新しい鯛が來たので明日の分に鹽をふつて置いたのか、どう解釋してもよいやうである。しかし前者が句の眞實を物語つてゐるやうである。

わたしは鯛を鹽するといふ感じが、いかにも幅廣い、新鮮な感じだつたので、他の何物の解釋よりも唯これだけでいゝ句であると思ふた。此場合鯛は小鯛の類であらう。女扇のやうに尾がはね上りその尖端に自ら潮曇りさへ感じさせるくらゐである。それへ荒鹽をばらばらと女の器用な手が撒いた。鯛は一そらくれなゐに沈んでいきいきとして見えた。一脈の新しさが句意をつんざいてゐる。

召波の別業に遊びて

行く春や白き花みゆ垣のひま

蕪 村

前書のとほりの句意である。すらりとした丈のすがすがしい蕪村らしい句である。

夏の近づいた行春の一日、よく白い花が目につくものである。白い花は清淨で、決して人に嫌はれることがない。まことに淡々としてゐる。眼を閉ぢてみると浮んでくるは香に白い花ばかりでは

ない、それに映じた一つの心である。すがすがしいものを見たときの心がわたしに思ひ出させる。特に召波の別業でなくともよいのである。

竹の子や見の齒くきの美しき

嵐 雪

子供と對ひ合せになつて膳をかこんでゐる。何か子供があどけないことを云つてゐるので、父母もこれに耳を藉しながら食事をして、ふと氣がつくと子供の餅米のやうな齒なみが、いくらか透きながら美しく揃つて見え、齒ぐきも桃色である。竹の子を食べるくらゐであるから九つか十くらゐかも知れない。しかし竹の子がどうも不調和のやうに思はれてならぬ。或は竹の子の精悍さを何となく併せ描いたのかも知れない。子供の生ひ育ちといふものと結び併せた句のやうである。かりに九つか十くらゐだと考へて見たが、之は五つか六つか七つか八つかでもよい。年齢のすくないほど齒ぐきの美しさが初々しく見えるやうな氣がする……。

俳道襟記

發句道の人々

芭蕉の全生涯の發句をまとめて讀んでゆくと、何時何處で何をしてゐたかといふことが能く解る。まるで一篇の長篇小説をよむやうに江戸や京洛、故郷伊賀への往きかへりなどがよくわかる。ことに前書のある場合、たとへば誰々を尋ねてとか、何々の國に入りてとかいふ前書のあるとき一層その小説にこくが加はるのである。奥の細道の一篇はこれを小説といふ氣持からはいつて見ると、その内容がにはかに鮮明に生きて來るのである。旅に病で夢は枯野を馳け廻るといふ絶吟は、彼の長篇の最後に置かれた一行と見てもいい、そしてそれはとても立派なしめくりを持つてゐる。

小説といふものは小説家だけが持つてゐるものではなく、どういふ人間でも只一篇の小説は持つてゐる筈なのだ、一生涯が一つの小説として考へて見るなれば、どういふ人間でもかけ代へのないその小説をもつてゐるものである。ことに俳人はその一句づつを生涯の歲月の間に疊み込んでゐて、殆、生活記録のやうな詳かな折々の悲しみ喜びを色づけてゐる。それを何年かあとに讀んでゆくとはつきりと何時どういふ心持でゐて何を考へてゐたかさへ解るのだ。發句に心理がないなんて

いふのは嘘である。心理描寫はあらゆる發句を通して見てもその全幅がそれによつて動いてゐることと分るのである。

假令は蕪村には蕪村らしい小説があり、一茶には一茶らしい悲しい小説があるやうに、正岡子規などにも多くの小説がその發句と發句とをつなぎ合せることによつて、描寫されてゐる。漱石などもあれほど多くの作品を遺してゐるが、その發句も晩年近くになると後の小説作品よりも、ずつと生活にふれた日常の暮しがよくわかるし、その晩年の心境がつぶさに表現されてゐる。小説家である夏目漱石が却つてその小説作品のなかに自分を盛ることをしないで、發句のなかで自分を表はしてゐることは、發句が彼にいかにか心安い親しい形式文學であつたかを肯かせるのだ。

その日暮らしのでたらめ小説をのたくつてゐる小説家にくらべると、俳人が生涯に一つしか書かない懸け替へのない小説は、どれだけ苦汗を流してゐるかも分らない、その一句あてを丁寧に打つて行つてゐることは、殆くひのない描寫だと云つてよいのである。さういふ意味で一茶などは個性的で可成に深刻な描法を試みてゐたと云つてよい。こたわらずに思ひ切つて衝き進んでゐたことはその發句のいいわるいを別としても、立派な自傳的小説として見られるのである。彼の全句集には彼の悲しみがあつた人としての彼がいつも信州辯で嘆いてゐる有様がよくわかるのである。言文一致の發句といふものが一茶によつて創められてゐると云つてよい位、縦横に地方語や平常の言葉を

巧みに取入れてゐる。その故郷を皮肉つたり遣つ付けたりしてゐる辛らつな作品は、とうてい文章では見られない執り方をしてゐる。ふるさとは蠅さへ人を刺しにけりといふ句の心は諷刺骨を刺すやうなところがあつて、一茶の狙うたものが逸れてゐない美事さがある。チャアライ・チャツブリンは一茶の俳句を読んで感心したさうであるが、それは一茶の飄逸や滑稽な發句をよんで見て、單に滑稽であるために面白く思うたのに違ひない、本統の一茶の悲しい心持が解つたかどうかは疑しいものである。併しチャアライ・チャツブリンも相當の人物であるから或ひは一茶の本統に觸れてそれを解つてゐたかも知れぬ、ともかくチャアライが見た一茶の世界はその發句道のこまかい呼吸づかひよりも、滑稽な小説を持ち、悲しい物語を持つてゐた一茶に興味を覺えたものであらう。チャアライは喜劇俳優ではあつたが、それよりも最つと悲劇俳優であつたために一茶を読む氣持がうごいたのであらう、一茶もまた喜劇俳優であつたよりも、より悲劇俳優であつたからである。一茶は三度も妻を代へてゐるし、子供に死に別れ、その上繼母であつたために家庭的にいつも嘆き疲れてゐた人であつた。彼の作品にいがみや、そねみがあつたのも偶然ではないのだ、そして彼ほど正直に發句を小説化して表現してゐた俳人は、古來稀でもあつた。僕の一茶に認めるものは彼の發句作品があれほど人生を描いてゐても、やはり發句の形式を破壊しなかつたことである。大抵の俳人ならば破調の企を取つたであらうと思へるのだ。芭蕉でさへも破調を取つた時代があつたやうに、

一茶の生活内容が窮屈な發句では我慢できないものがあつたに違ひないからである。それに彼をして文章を書かしたならば相當の小説的記述を敢てしたであらうし、さういふ作品があつたとしたら必らず見るべき辛らつな記録が爲されたであらうと考へられるのだ。發句の上でさへあれほどの深刻さが認められたくらいであるから、文章となつて表現されたらもつと骨を刺す悲しさが盛られたであらうと考へられるのである。

詩人とか小説家とかいふ人々は大概みな一度は發句の洗禮を受けてゐる。文學入門時代の優しい翼を發句の上に翹めて、まだ充分に育たない自分の才能を試練するのである。そして大抵發句の方から詩に移るか、短歌に移るかしてゐるが、詩の方に移つた僕は發句の形式が窮屈で身もたえが出來ないやうな氣がしてゐた。それに若い時代は女人のことを歌ふことが多かつたために、發句のなかでそれが盛り切れなかつた不自由さがあつた。だから僕は發句が何だか能く解らないあひだに詩に移つて了つたのである。

發句といふものは一生に二度は出逢ふことのできる、また、二度は逢はなければならぬものらしい、文學的ふるさとであると云つていいのだ。詩に移つた僕の作品にも何時の間にか發句の表現を詩の中に溶かし込んで、發句の簡潔な細かい緊張した表はし方をするやうになつてゐた。さうい

ふ表現がいくら僕を變つた傾向を持つ作品のやうに人々から思はれるやうになつてゐた。それは僕が意識的にさういふ表現を敢てしてゐた譯ではなく、寧ろ、僕自身の見方が永い間發句を作つてゐた間にその勘どころを覚えてしまつたのである。素材の選擇とか、特異な細かい言方とか、常にその表現に時間の感覺があるとかいふ點で、その時代の詩の傾向の外にあるものに見られ、同時に新しさを感じさせたのである。これを發句の方からいへば何にも新しいことがなかつたのだ。けれども僕自身からいへば發句の方でみづちり覚え込んだ技法によつて詩作することが、可成にできばきした表現を盛ることができたので、僕は殆ど發句を詩の中に粉微塵にくだいて現はしてゐたのである。

僕が小説らしいものを書くやうになつてから、發句から割れて出た描寫が文章をひきしめてゐることを感じ、やはり發句を作つたことの徒事でなかつたことを感じた。或る意味で發句道の鍛へがなかつたら文章を書くことを知らなかつたかも知れないのだ、それほど發句といふものは知らないうちに「文章」を教へ、表はすことを叶へてくれる機關になるのだ。只、それが人間のことを書く場合には著しい役割はつとめてくれないが、人事の雰圍氣や自然現象及び都市街區の描寫には常に細かい見方を教へてくれるのである。實さい、發句を嘗て作つてゐた作家の文章といふものはかつちりと引き緊つてゐて、むだが尠なく、何處かに俳句のほひを漂はしてゐてこくがあるものだ。

發句や詩の下地のない作家の文章はかすかすしてゐて懐しみも潤ひもなく、只、そこに文章だけが存在してゐるばかりである。さういふ文章はいつも書くことがらしか描かれてゐなくて、匂ひや色や懐しみといふものが窺はれない、讀んでゐても退屈にさへなるのである。

尾崎紅葉の發句は派手な素材を選んでゐるだけで僕は感心しないが、その作品の美しい文脈といふものに俳句が沁み出してゐることに氣づく、金色夜叉の鹽原行の美文などにもそれがある。紅葉といふ作家のなかにあつた發句の下地が、紅葉自身すら知らない間にその作品にべつたりと行き亘つてゐることに氣づくのだ。泉鏡花さんの作品にもこの發句の匂ひや心持がいたるところに流れてゐて、文章をこまかに一行づつを外して見たならば立ちどころに數百吟が出来るかも知れないほど、文章に發句の建築が施されてゐる。これはこの作家の質であるにちがひないが、へいぜい句作をしないでゐて時々發句を作られる人の文章らしい、奥に發句をもつてゐる作家のやうである。文章といふものには凡ゆる藝術形式をもつたものほど、讀んで樂しさや懐かしみが感じられるものである。或る部分は詩であつて或るところは發句のやうな下地があり、そして或る心持のなかには和歌の漂ひがあるといふのも、よく描かれた文章の特質でなければならぬ、畫かきが見れば繪を感じ出すであらうし、音楽家はそこから作曲的動機を生み出すかも知れないのも佳き文章の特質でなければならぬのである。作家の質のよいところが凡ゆる藝術形式のどれにでも一つの匂ひを醸き

當てさせるといふところまで、佳きものは佳きものを多く持つてゐる筈のものである。

正岡子規の文章などにも何時もびつたりとした表現や、簡潔さがあるのも、發句道の修業や心得がさうさせたのである。病苦十年の文章や折々の俳諧的隨筆の思ひ切つた物言ひも、自ら發句の切れ味を持つてゐるのであつて、普通の凡くらではあゝは云へないのだ。妙に氣魄といふやうなものがあつてあれだけの開きを持つてゐたことは、却々の作家であると云つてよい。芭蕉をけなし蕪村を取り上げてゐるのは時代がさうさせたのであらうが、餘りに小さく固まつて芭蕉をけなし蕪村を少しヒステリーの氣味がないでもないが、併しその快刀風な評論隨筆はことごとく彼が發句道場できたへた手腕に外ならないのである。

これは餘り評論家も云つてゐないやうであるが、夏目漱石の作品などには發句の下地が非常にちからを爲してゐて、ゆつたりとして作品に取りかゝつてゆく態度や、自然人事の洞察に何かいつも發句の引つかかりを持つてゐて、その興趣の方向がいつも低徊してゐるのは發句道の下地があるからである。或る意味で漱石ほどその俳諧趣味といふものが露骨にあらはれてゐる作家は尠ないくらいである。「我輩は猫である」は僕の十七八くらゐに發表された作品であるが、あの小説は小説家夏目漱石の作品であるより、俳人夏目漱石の小説であると云つていゝ程、あの中的人物の性格の特殊性、及び小説構成の凡てが俳趣味といはれるほど、(當時さういふ言葉が流行してゐた)俳人であつ

た漱石の爲し得た小説であつたのだ。

夏目漱石の發句といふものは晩年には佳い句があるが、僕の好みからいへば甚だ遠いものであつて、自ら教へを受ける發句などは一句も見當らない、その句作の動機なども深いものでなく、いはゆる小説をかいて草臥れたからその草臥れ直しに作つたやうな發句が多いのだ。従つて、派手なところがあつて淋しさに追ひ廻されてゐるやうなところがないのだ。晩年胃腸を害して病床に親しんでからは道にしみじみと身を以つて發句道に打ち込んだやうなところがあつたが、その他の句は僕には親しまれなかつた。あれほどの作家も發句道に年季を入れるといふこともなく、その態度にどこか遊んだところがあつて敬服できなかつた。子規などくらべると、まるで心の構へ方が違つてゐたのだ。子規は骨身を削るやうな苦しみ方をしてゐても、漱石はさういふ精進をする必要もなかつたごとく、いつも淡々乎として句中に遊んでゐたのである。小説家であつて發句を作るやうな人にはどこかに遊んでゐるところがあるのは、どうにも止むを得ないことだ。僕なども可成に切迫した氣持で句作にしたがふてゐるけれど、やはり餘技あつかひにされ遊びごとに見られるのも、また止むをえないかも知れぬ。その點で身も魂も、そして經濟生活すらも犠牲にしてゐる専門の句作家に叶はないやうである。

漱石に教へを受けた芥川龍之介の發句なども餘技のやうにいはいはれ、あるひは餘技であつたかも知

れぬが、彼自身は句中の鬼と格闘するほどに句中に悶えてゐた。その狙ひ方は漱石よりも適かにくるはないところにゐて、生涯の七十何句はそれ／＼に立派な發句をかたちづくつてゐた。元祿の凡兆も一生のうちに七十何句しか残してゐないやうに、芥川の句も取捨されて數渺なくしか遺つてゐないのは却つて床しいやうな氣がする、——芥川は一年前に作つた發句を取り出して、それを作り直して、かういふふうに置きかへたと云つてよく示してゐたが、さういふ丹念さや熱情などは漱石の句に見られなかつた。あながち、それは芥川が凝性であつたばかりでなく、僕からいへば芥川澄江堂は發句をつくること甚だ好きであつたのだ。好きといふことは芥川にとつてその藝術的良心ともいふべきものが手傳つて、何度も作りかへたり置き代へたりさせたのである。漱石の句が子規のながれを汲んだ明るい頭のよい發句であるとしたら、澄江堂はあくまで神經の響を句の中にさへ漏らしてゐたと云つていゝのである。漱石の程度の句作ならば天下の俳人で併び立てられる人が多いが芥川の句となると素人が俳道の奥にはいつたやうで、これを他に求めるやうなことが出来ないのである。その鋭い見方に至つては漱石のゆつたりしすぎたやうで、一面に鈍重さをもつ句風とは、まるで反對であると云つていゝのだ。

芥川の描寫や表現をよく讀み分けると、いかにも發句を勉強した人らしい緊めつけた文章が見られるが、それはやはり發句道でできたへ上げた手腕だと云つてよい。「枯野抄」などに芭蕉の臨終を

がいたところに、丈草、去來、其角や嵐雪の一人づつを短かい行文の間に、いかにもその人らしい風格を抉り出してゐるところなども、やはり發句に打ち込んだ人でないとあそこまで行けないのだ。しかも芥川の小説の自然描寫などに氣をつけて見ると、さながら發句のやうな効果をあげてゐる文章がある。その表はし方の淋しい鋭さを含んでゐるあたりは、彼の發句に取り扱ふ氣持を表はしてゐるのである。内側へ詰め込むやうな素材の描寫をぎり／＼までに仕遂げた澄江堂は、何といつても發句のきたへが彼にあればどの描法を教へたと云つても過言ではないのである。漱石の冗長な行文はやがて彼の發句がさうであるやうにさせたのも、必然であらねばならないのだ。

俳人で小説をかいた作家に高濱虚子がゐるが、寫生文をあれほど旨くまとめ上げた作家もこの人ひとりであらう、漱石も寫生文の影響はあつたであらうが、虚子のごとく素直なものではなかつた。最近の「時雨をたづねて」といふ作品なども、俳人の書いた小説としても、くらうと小説としても旨みが沁み透つてゐて讀む者に樂しみを感ぜさせる作品であつた。或は虚子の發句をとらないでも、僕は彼のかいた小説をとりたいくらいである。それほどあまみがあり俳趣味があり小説道の本格的な態度がある。その下地には彼の俳句に見る乾燥されたものがなくて、濕ひと親しみがあるのだ。僕は發句の仕事はもう澤山であるから虚子に小説をかいて貰ひたいと考へてゐるのである。泉鏡花や幸田露伴のやうな特異な位置が彼にあるやうに、どくどくの小説を一年に二度か三度か見

せてほしいものである。かういふ考へを持つてゐるものは僕一人ではあるまい、それは虚子が最後の仕事としても、嘗て寫生文を唱導してゐたころの虚子なる作家がかういふところに辿つて來てゐることを、人々は知りたいからである。

瀧井折柴なども俳人出の小説家であつて、文章に朴訥をてらふ技法はいやみであるが、彼も追々筆のさきで捏ねる文章に厭氣がさして來て淡々として書く時期があるに違ひないと思つてゐる。それは見方によつていかにも發句を勉強した人の文章であつて、只の「文章」だけを置きならべる作品でないことが分るのであるが、もつとくさみの脱けたものを書くことを僕は勧めたいと思つてゐる。一生のうちに文章といふものは始めから終りまで一つの色と形で押し通すものでなくて、或ひは深くなるか、枯れきつて響を爲すか、またもう一度おさない文章にかへつて行くかするものである。それは發句について見ても人はその晩年にはよりよき作品を示してゐるもので、少しづつ變つて行つてゐるからである。

大抵の詩人とか小説家とかいふ作家はその小説をかいてゐる間は、發句をかいてゐない。詩人である場合は詩をかいてゐて、發句のことは忘れたやうに作つてゐない。小説家で詩をかいてゐた人も小説を製作してゐる間には詩をかいてゐないやうである。そしてそれらの發句となるべきものと、詩となるべきもの、それらのエスプリは悉く他の大きな形式文學の中に注ぎ込まれてゐて餘すところ

ろがないのである。發句がたとへ短かい形式であつてもそれを片手間に現はすといふことがいかに困難であるかゞ分り、そして藝術は孰れか一つのものしか力を分けることができないことが分る。發句も作り詩もかくといふ譯にゆかないのだ。片手間に發句が作られないところに俳句が堂々たる別箇の藝術であることがわかるのである。芥川はよく發句をつくつてゐると小説がかけないと云つてゐたが、僕なぞも一句を作るのに一日苦吟してゐて仕事が捗取らなかつた。だから仕事をしてゐる時はなるべく發句に近づかないやうに心がけてゐたのだ。僕はこれを俳魔と呼んで心中おそれを爲してゐたのだ。

一たい發句といふものに面魂があつて、蕪村とか一茶とか子規とか芭蕉とかその他しつかりした俳人にはそれぞれの人を人とも思はない、うしろにも前にも動かない作品の上に面魂がのしかつてゐるものである。凡そその面魂——てこでも動かない氣魄のこもるやうな俳人になれば、充分に立派な作家であるのだ。ふにや／＼した句作者は同様にふやけた人物に外ならないのだ。子規などは丈がのびてゐて悠々としてゐるところがある。蕪村なども決して材料の前でおど／＼してゐなくて、大膽不敵に打つかり行くとして可ならざることないまで、頭が冴え、つら魂が据つてゐるだ。

蕪村の齒切のよい單的な調子は、芭蕉とくらべると活潑になつてゐるけれども、芭蕉を一步前に

踏み出してゐるとは考へられない、芭蕉は少し勿體振つてゐて陰氣くさい、どこか物々しいところがあるにくらべて、蕪村の發句はすばり／＼と材料を叩き斬つて自由闊達になつてゐる點で新進の氣概はあるのだが、——そして奇警なお化けの俳句や漢文調がこゝろみられたり派手な材料がうたはれてゐた點で、窮屈な元祿調から踏み出すことができたことは認めるが、——が、しかしさういふ奇抜な材料をあんばいした蕪村は大てい旨みや味ひがうす手な感じがして、中身が一杯になつてゐる感じがしないのだ、ほんとうの蕪村はやはり芭蕉のあとをついだ、物靜かな中に明るい意匠をもつてゐる彼をいふのではないか。「三日、翁の句を唱へざれば、口、むばらを生すべし」といふ程の、心からの尊敬を芭蕉にもつてゐた蕪村であつてこそ、始めて「楠の根をしづかにぬらすしぐれかな」の境致に辿りついたではなからうか。そしてその手法や表現は假令漢文調が用ゐられてゐても、ついに芭蕉の句法や心持を離れることが出来なかつたのである。いつも芭蕉を一步踏み出して見れば後戻りをし、又一步ふみ出したところに、蕪村の大きさと細心さとがあつたのだ。さういふ點で蕪村の輪廓が芭蕉よりも太く、どこか、がつしりしてゐたことは事實であらう。

蕪村の句に「山水の減るほどへりて氷かな」といふのがあるが、減るほどへりて、などといふ自由な表現をらくにやつてゐて、冬がれの淋しさ極つた枯れ切つた氣持を出してゐるところなぞは、却つて大まかな口調ばかり高くした發句よりも、どれだけ自然の底をさぐりあてゝゐるかも分らな

い、それでゐて、すらりとうたひ流してゐるところに、蕪村らしい腹のすわつたところが出てゐるのである。發句といふものの旨さといふものは、いつもちよつとした新しさが大變な役割をつとめてゐるものであつて、却々、その、ちよつとした新しさに辿りつくことが容易でないのだ。だから芭蕉と蕪村とをならべて見てゐると、氣のせいかな蕪村のはうが感覺的にどこといふこともないが放膽で明るく、そしてちよつとした新しみが漂うてゐるのである。

蕪村の句に「木枯や島の小石目に見ゆる」といふのがあるが、これなどは蕪村の根強い眼の配り方があらはれてゐる、旨い發句である。同時に芭蕉の名を三日忘れてゐては口にむばらが生えると云つた蕪村が、いかによく芭蕉をかみ砕いて消化してゐるかが分るのである。恐らく元祿以後いまままでに芭蕉をあれほど自分の中にこなし切つた俳人は、先づ蕪村より外にはゐなかつたであらう。そのやうに蕪村が自然のはらわたを引きずり出して成功してゐるときは、いつもうしろ側におぼろ氣に芭蕉が立つてゐるやうな氣がするのである。

子規は蕪村の雄渾、壯大なる意匠とやらを積極的だと云つて、芭蕉の主觀的發句を排斥してゐるが、芭蕉の本統は心境にあるのであつてそれをけなして了つては、芭蕉の一番いいところを認めないのと同じである。僕らの中に芭蕉が生きてゐるのは彼の心が生きて映つてゐるのと同じだ。子規が芭蕉をやつつけてゐるところにどうも素直さが感じられない。

蕪村の作品のなかに最も注意したいのは、十行ばかりの人を悼んだ詩があることである。今から見ても立派な新しい詩になつてゐて、別の名前で發表したら蕪村だか誰だか分らないくらいである。詩が新體詩といはれてゐた最初の詩集は、明治十五年七月に「新體詩抄」といふのが出版され、これが日本での詩集として初めての書物である。井上哲次郎、矢田部良吉、外山正一の三氏の合著になつてゐる。しかも蕪村はその時代よりも百年も前に新しい形式詩をかいてゐるのだから、ちよつと驚く、よくよくの逸才であつて始めて爲し得る作としなければならぬ。

君あした去りぬ

ゆうべの心 千々に何ぞ遙かなる

君を思うて岡の邊に行きつ遊ぶ

岡の邊なんぞ かくも悲しき

蒲公英の黄に齊のしろう咲たる、見る人ぞなき。

この詩は彼の發句に取り扱ふ素材ほど露はな人生には直接觸れてゐないけれど、その美しい行文のあひだに彼の發句に見ることの出来ない優しさがこもつてゐる。或る老人の死を悲しんでうたつたものらしいが、僕などは却つて女人が誰かを悲しんだ詩のやうに思はれるのも、蕪村の優しい心根が出てゐるために左う思はれるのであらう。しかも今の時代の詩人が書いた詩と云つても大した

違ひはないやうである。畫人蕪村は同時に俳人でもあり詩人でもあつたのである。

僕は時々考へるのであるが、芭蕉時代から子規時代を通じた二百何十年間に、文學として俳句がどれだけ進んで来たかと考へて見ると、或る意味で内容にしる表現にしる逆戻りしてゐるところがあるのだ。それは蕪村時代にはその時代らしい進歩があり、子規時代には子規の時代の進み方はあるにしても、どれだけも進んでゐないやうな氣がするのである。一人の凡兆、一人の芭蕉すらも見當らない、ともかくも芭蕉を一足飛びに飛び越えたほどの俳人がゐなかつたことが事實である。つまり發句は芭蕉から叩き破られて、そして芭蕉で大ていのが云ひつくされてゐるやうに思はれるのだ。芭蕉のあと操りでなければ亞流としか思へないのが、發句道の暗雲になつてゐる。僕のやうな氣の小さい者は、だから發句といふものは大それた破調や字足らずで胡魔化しの製作をしないで、靜かに芭蕉流のなかにあつて或はうたひ或は悲しんで居ればいいではないか、そしてさういふ美事な祖先の教へのなかから我々はまた出来るだけ新しくなるのもいいし、心理的になつてもいいではないか、我々は壯烈な碧梧桐の敗北的な破調を悲しむよりも、もつと素直に發句にはいつて行くべきではないかと思ふのだ。何々やでもいいし何々かなといふ古い結びの言葉をつかつてもいいのだから、その中でせいぜい新しくさへなればいいのではないかと思ふのである。

今の若い人はどうやら發句といふものを文學として考へ、餘技とか娛樂とかいふふうの見方が改められて來てゐるやうである。たとへば蕪村とか子規とかいふ作家をよく噛み分けて研究してゐる人が多いが、その見方は飽迄「文學としての俳句」であつて娛樂とか遊び半分の文學として見てゐるのではないのである。今までは俳句でも一つ作つて見るかといふ巫山戯た調子から句作をしたり、さういふふうに發句を見る人があつたが、その不愉快な傾向が最近に無くなつたことは事實である。ことに俳句製作と研究が、各方面に起つてゐる根本の氣持を割つて考へて見ると、それはどこまでも文學としての俳句をもう一度考へ直さうとしてゐるらしいのである。文學形式のなかにあつた俳句の聰明な使命がさまざまの意味で、よき解釋を爲されやうとしてゐるのである。

文壇の方ではこの十年の間にいろいろな新進作家を生み出してゐるが、發句の方面では特に新進俳人とか天才的出現とか、すば抜けた句作を携へて現はれた人を見ない。それは假令少し位新しい作家が出て發句といふものは、新進の小説家のやうに變れるものでないのだ、變るとしても些んの少しづつの新しさにすぎないから、はつきりとは分らないのである。しかし今の發句が新しく生れかはるといふことは、どういふ意味にも衝き破れない窮屈さがあり、その鼓や型が外側では決して破れなくなつてゐるのだ。子規歿後二十年も経つてゐても別の意味の子規が現はれてこないのは、現はれる必要があつても、よこにも、たてにも動けなくなつてゐるからである。

或る意味で心理描寫や氣持本位のものでできるかも知れぬが、やはり外側が古風で内から新しくなるより、とる道も、行きつくところでもないのだ。だから十七字形式をまもること、内容が詩のやうなものであつてもいいし、詩の素材をあさつてもいいやうに思はれるのだ。もつと深く、もつと深く、ある意味で小説の心理描寫のやうなものに斬り込んで行つて、そこで發句は發句でありながら、發句の中にも小説が存在し得るといふことを、作品の上にはあらはして行つたら自ら道が拓かれはしないかと思はれるのである。あるひはかういふ傾向を聰明な若い句作家は既に考へてゐるかも知れぬが、さういふ開きは發句道にさす朝日のやうに明るい將來を示してくれはしないかと考へるのである。

も一つ發句のなかに女人のことが餘り取り扱はれなかつたが、それは女のことになると何時も發句が浮ついてよい効果が出なかつたから、自然に避けてうたはなかつたものらしい。これも表現が心理的になれば何もなまなましい女人のことを扱はなくてもいいのであるから、將來はこの方面にもつと明朗な句作があるべきだと考へてゐる。それは今まで女のことをあつかふことが難しいために控へられたのと、妙に道徳的な立場からも敬遠してゐたせいもあるのだ。不倫な戀や、ふしだらな戀愛沙汰は發句にはならないが、その純粹な氣持からはいつて行つた戀愛や、その空氣なれば、これは今までに拓かれなかつた境致でもあるから、どんどん開いてゆくべきである。只、浮ついた

氣持や、こなれない境致にあるものはそれ自身下らないものであるから、それは表現されない方がいい、危険があり難かしい方向であるだけに、落着いてかかれれば發句の素材がすつと開けてゆくのではないかと考へるのだ。

芭蕉や蕪村などの句に、女人のことを表はしたものに、どれだけも他の取材の發句にくらべて秀れたものはないのは、やはり女人をとり扱ふことの至難さがあるからである。それに彼らの失敗してゐるのはナマのままの女人をあつかうからであつて、心理や雰圍氣や輪廓をあらはして行けばどれだけでも失敗しないのだ。ナマのままでは生々しくて小説には向くが、發句にはならないのだ。

とにかく發句は何とかならなければならぬが、これはやはり、すば抜けた新しい傾を持つた人物が今までのものを敲き破つてくれるのを俟つより外はない、いまの發句道はそれほどへとへとに草臥れ切つてゐるのだ。

子規は生きてゐる

一 子規と「ホトトギス」

僕の十五の時に近所に平岡といふ東京の言葉をつかふ人がゐて、或日一冊の雑誌を古本屋に返して来てくれと云ひ、僕もついであつたので古本屋に返しに行つた。何氣なくその雑誌を見ると、片假名で「ホトトギス」と眼につきやすく書かれて、裏表紙に蛙だか何だか譯の分らない滑稽な鳥羽繪が載せてあつた。僕は「ホトトギス」といふ題名と滑稽な寫生畫に注意して見たが、なか身は俳句のことを書いてあることを知つた。僕はその時にもう俳句の眞似事を作つてゐたので、「ホトトギス」といふ雑誌は偉い雑誌だと兼々思うてゐたが、見たのは始めてだつた。それから僕は毎月「ホトトギス」を借りて来て讀んだ。

金澤に北聲會といふ北陸で古い歴史を持つ俳句の月並例會があつて僕も出席するやうになつたが、その運座の句稿を「ホトトギス」の地方俳句會といふ六號組のところに毎月幹事が熱心に出稿してゐた。併し百句くらゐ出して三四句くらゐしか載らない、北聲會の三四の俳人も投稿するが

誰も採られなかつた。餘程勢力のある雑誌で嚴撰を極めてゐたものらしい。その「ホトトギス」に子規の名前が度たび出、子規といふ人が始めて「ホトトギス」を發刊したものらしく、子規といふ人は餘程えらい俳人のやうに思はれた。そして僕がその名前を知つた前の年の秋にこの人はもう死んでゐた。

僕は子規といふ名前が好きだつた。「子」の字の下に「規」の字がよく座つてゐて、清楚で嚴しいところもあり此の字の意味が「ホトトギス」と讀むのか知らず、そんなことも珍らしく思つた。

「ホトトギス」には變な雅號のある人が多かつた。碧梧桐とか虚子とか鳴雪とか鼠骨とか藤眞とか四方太とか左千夫とか、兎も角、雅號といふものを有たない僕はこれら先生方の名前が珍らしく、それだけでも俳句といふものに這入ることは難かしいと思はざるを得なかつた。殊に印象に残つたのは虚子の雅號でどういふ意味か分らず、寒川さんの鼠骨はひどい雅號もあるものだと思ひ、何時も鼠骨と讀まずに文字通り失禮ながら鼠のホネと讀むのであつた。それから坂本四方太も變な雅號をつけたものだと思うた。そこへゆくと子規といふ名前はすつきりしてゐて覚えやすく忘れがたい印象を與へた。「ホトトギス」は悪い印刷所で印刷をしてゐたのか、毎號も子規といふ活字の角がこぼれてゐてポロ／＼だつた。「子」の字がいつも缺けた活字のやうに記憶してゐた。「子」の字は活字のなかでも一番多く刷られるせいかも知れない。

間もなく毎年九月十九日に彌祭忌があり、彌祭忌といふのは子規忌のことを意味すること、子規忌の句には秋の果實、栗、柿、糸瓜、梨などが、子規の好物とされてゐたので讀み込む人が多かつた。北聲會でも子規忌が行はれ、僕は單に偉い人とだけに餘り俳句も讀まないくせに、十五の子供風情で出席して子規忌の發句を作つた。恐らくさういふ席上に集まつた人々も、今から考へると子規を慕うて忌日に集つた訣ではなかつたらしかつた。子規歿後の兩三年は子規忌の流行期であつたと同時に、子規の遺業をくちにせずにもられない時代であつたらしかつた。芭蕉歿後の元祿後期はそれぞれの新興發句道の旗上げが、江戸と京洛とを隔てて興つたやうに、子規の死後、子規を繞る諸俳人は様々な意味でそれぞれ目ざすところに進んで行つたことは當然のことであつた。地方俳壇の人はそんなことを知らずに子規忌やら子規の短冊色紙やら、「ホトトギス」の古本を集めるやら又は事新しい噂話やらしてゐる間に、俳壇の中樞は少しづつ移動して行きつあつた。僕は子規の物を読み集めることに熱心になり、俳句といふものが此の子規といふ人で奈何にはつきり俳句といふ形式詩の内容を教へて行つたかを知つた。少しの疑ひもない明適した的にいつも寸分違はずに素材を射り當てたこの人は、色、形、時間、感情などといふものを片ツ端から區別をし、適確に表現して行つた。僕のやうな初學者でも讀めば何を意味し何を表はしてゐるか解り、俳句は芭蕉や芭蕉の後韻を慕ふ人々の作品のやうに深々と考へなければ判らないものよりも、もつと明るい解りやすい

愉快な藝術であることを知つたのである。

僕は子規の作品を讀んで俳句が始めて解つたと云つてよい、わかりやすいだけでもどれだけ僕の發句道への近道を切り拓いてくれたか知れなかつた。眼が悪い時に眼鏡をかけて見て始めて風物の細部がわかるやうに、僕の初學道の向ふの方がハッキリと見えて來たのである。これは子規といふ人がつくつてくれた上等の硝子の玉がはいつてゐる眼鏡かも知れなかつた。僕はそれを大切に藏つてゐて見えないものに當て嵌めて見ることにした。つまり子規は俳句を始めて作る人にも能く意味がわかり、また俳道の底に徹した人でも爽ぱりとして澁滞なき明るい表現を感じるのである。芭蕉の經滲、蕪村の豪邁を隔てたこの人は、ともすると澁滞とこぢつけの味ひを芭蕉から嗅ぎ出し、これを嫌つて寧ろ、蕪村の潤達に打ち込んで行つたのである。殊に著しい天明以後の蒼輩が町方の碁や將棋と同じものを弄ぶやうに俳句を墮落させ、天保前後の亂次ない俳句は殆墮ちるところまで墮ちつくしてゐたのだ。賭俳句、川柳俳句といふやうに表現内容を問はず、只、芭蕉の一番わるいところを過つて狙うた俳句ばかりが流行した。僕が「ホトトギス」を讀み始めた時にすら、僕は近くの裏町に住む十逸といふ俳句の宗匠のところに行つて貰ひに行つてゐたが、その宗匠は口ごとに翁がかう申されたとか、翁はかういふ發句は嫌ひぢやつたとか、これは翁の教へにそむくからいけないとか云つてゐたが、僕はその阿叟おきなが何だか、どんな人間だか知らなかつた。只、空返事は

かりしてゐたが、後年——二三年後にやつと芭蕉のことを翁といふのだといふ意味のことを知つた。まるで彼らは芭蕉を祖父か何かのやうな親密さで云ひふらしてゐたのだ、少しの定見や眞實性がなく、また自然の素直さなどを芭蕉から見とゞける宗匠ではなかつた。只、芭蕉は風流人であり風流といふものはこんなものであらうといふ程度で、俳句の指南をしてゐたのに過ぎないのである。かういふ人に親類あつかひにされてゐては、松柏の下で芭蕉は浮ばれなかつたであらう。

芭蕉が宗教的にさへ狂信崇拜されてゐることに、子規は妙な反感を抱いてゐて評論でよく當つてゐた。子規が懊惱の病褥に集る全國の地方俳人の心づくしの手紙や贈物や、虚子碧梧桐鼠骨その他の心勞は元祿の去來丈草ほどに厳格な師弟の間柄ではなかつたけれど、その心の美しいいたはり芭蕉門諸家に較べて決して劣るものではなかつた。子規が芭蕉のことを云ふ間に既に彼は明治の芭蕉くらゐに漕ぎつけてゐた。殆、芭蕉以上に病苦のいたましい生活が人々に深い愛惜の情を揺り起してゐたのである。

二 子規中心の俳壇

子規の出現は日本の芭蕉研究を確かに十年遅れさせた。

子規が明治中葉に出なかつたとしたら日本の俳句はどうなつてゐたか、墮落しつくした所謂月並

俳句が奢りに奢つてゐたに違ひなかつたのだ。或は子規にかはる別の天才が生れ出たかも知れないが、子規のごとき逸才であるかどうかは疑はしい。子規が出て來たことは、どの意味からも正しく、どの意味からも英雄の出現する時期が正確に時代をつくり上げるやうに、子規は恰度よいときに生れて出て來たものである。おあつらひ向きといふ言葉があるが子規ほどよい時に日本の俳句をよくして呉れた人はない。芭蕉より蕪村を、蕪村のなかに子規自身のはけ口を發見した彼が、蕪村をていねいに見、發句道の蕪村を天下に紹介したのは子規のほかになかつた。子規が蕪村をあれほど引き上げなかつたら蕪村は或は十年紹介されることに遅れてゐたかも知れなかつた。僕は思ふ、子規が蕪村をはじめ知つた時のよろこびは大したものであつたらうと、そして恐らく子規の生涯を決定してくれたやうな蕪村の魂は、子規にどれだけしつくり結びついたかも知れなかつたのだ。先覺、内藤鳴雪の紹介はあつたにせよ、鳴雪のなかに這入るには蕪村は大き過ぎてゐた。それは逸才子規のなかにはいつて粉微塵に碎け、こなれて、よく養はれて、芽となり日本派の俳句となつて再び生れたのである。僕はさういふ藝術上の宿命に美と傳統とを感じ、傳統といふものがどれだけ永い世紀を繕つくるものであるかを、ほのぼのと夜明けの清涼せいりやうしさの間に感じるものである。

子規は俳人蕪村のなかで云つてゐる。「蕪村の俳句は芭蕉に匹敵すべく或は之に凌駕する處ありて、却つて名譽を得ざりしものは主として其句の平民的ならざりしと、蕪村以後の俳人の悉く無學

無識なるに囚れり。著作の價値に對する相當の報酬なきは蕪村のために悲しむべきに似たりと雖も、無學無識の徒に知られざりしは寧、蕪村の喜びし所なるべきか、其放縱不羈世俗の外に卓立せしところを見るに、蕪村亦性行に於て尊尙すべきものあり、……」その句評に、「蕪村の句は堅くしまりて拙かぬが其特色なり故に無形の語少く有形の語多し、簡勁の語多く冗漫の語少し。」と註を加へてゐるのは、子規自身の俳句をそのまま自分で批判してゐると同様だつた。子規自身の句こそ固くしまつてはゐないが、柔らく確乎と目ざめるやうに緊つて、少しもうごかず、置きかへの利かないふんばりを有つてゐた。鳴雪翁が先覺でありながら彼に一目も二目も置いてゐたのも、故あるかなであつた。碧梧桐の豪放、虚子の細心を持つてしても子規の敵ではない、寧、子規の門葉のなかで光つてゐる二家であり、明治の俳人中最も手重い仕事をその生涯に負うてゐる人だちだつた。秋聲會の竹冷、愚佛、あとに後援した小波、紅葉の諸星と對抗的になりやすくなつてゐたものの、虚子碧梧桐のやうに死身になつて俳諧城に打つかつた人ではない。小波、紅葉は文壇的に有名な達人であつたが、發句の作品はとうてい碧虚の二つの城を抜くことが出来ず、天下はこの碧虚によつて二分されてゐた、子規の死後一層それが露骨な對立をして行つた。

元日や枯菊のこる庭のさき
鶯の今朝も鳴くなり楡の枝

子規
同

追込の小鳥しづまる秋の雨
母と二人妹をまつ夜寒かな
風呂吹や小窓を壓す雪曇
いくたびか雪の深さをたづねけり
落葉して宿り木青き梢かな
冬の日のあたらずなりし乾飯哉

子規
同
同
同
同
同
同

これらは子規の作品のなかで僕の尊敬してゐる代表的に明眉な俳句である。蕪村からぬけて出て、奈何にすつきりとした形と内部とを相和させてゐるか、「いくたびか雪の深さをたづねけり」の深い意味のこもつた表現では、芭蕉風であつて芭蕉から何歩かを先の方に衝き出てゐた。恐らく子規の全句集のなかで鳳翼のやうに光つてゐる作品であらう。蕪村の格調に響を感じて「かたくしまりて」と評した彼は實に敏感に柔らかい處に出てゐる。狙ひは靜かで素直で、少しもひねくれてゐないのだ。「追込の小鳥しづまる秋の雨」のなかにも、何か明治の東京生活が佛を忍ばせてゐて、吟懐の深い作句である。子規が一萬句あつても悉く蕪村を抜け出て居る譯ではない。

三 碧と虚の二つの星

子規歿後は寧、碧梧桐と虚子の二つの旗色が、それぞれの特色で對立してゐた、「ホトトギス」で

試作をつづけてゐた寫生文といふ文壇外の運動が、左千夫や四方太や鼠骨その他の作者の間に興つてゐたけれど、虚子の細かい洗ひ練られた作品には及ばなかつた。折々の漱石壇頭前の小品すら目にとまらない程、虚子はその寫生文から抜け出た小説體を爲して行つた。紅葉、露伴、天外の諸家にくらべて生新の佛があり、どこか垢ぬけのした讀み易い解りやすい描寫手法は、多年寫生文で鍛へた手腕と相俟つて次第に圓熟した一家の風俗を爲して行つた。子規の唱導革新の途上にあつた根岸流短歌の宗、左千夫などの寫生文小説とよい對照をしてゐたけれど、虚子には色氣と彩ある美しさがあつた。めに、左千夫から見ると世間的に高揚して行つたのだ。子規が宿痾と戦ひながら小説の臭みを厭惡して、その點で子規のキン玉は小さかつたとも云へるが、子規でなくともあれだけの病苦のなかにゐて、充分腕を揮へなかつたことを考へると、僕らと雖もキン玉を小さくせざるを得なかつたであらう。寫生文でなければ自然の正直さを表現することが出来ないといふ、終生小説道を睨んで隙さへあれば斬り込まうと身構へ、たうとうその仕事を果さなかつたのは、子規にその小説家としての才能のなかつたことが云へるのだ。病褥にあつてあれだけの大業を爲し遂げた子規であつてすら、やはり小説を狙うてゐたところに彼の人間があつた。蕪村の畫業、芭蕉と西鶴の關係を考へても、子規が寫生文の蘊奥から小説藝術の何かの纏まつたものを引き摺り出さうとしてゐることが判る。只、小説家となるには單純であつた性格がそれに進ませなかつた。小説といふものは

或る特殊な人ひとくさい複雑さを有つた人間に書けさうなものであつて、清いやうな人くさくないやうな人間には書けないものらしかつた。

虚子はさういふ意味で子規の周圍のなかで就中人くさい作家だつた。碧梧桐とくらべると碧梧桐の人くさは馬鹿氣を抜けたところがあり、虚子は體臭それ自らが来るやうな人くささであつた。虚子が「俳諧師」を公にしたことは子規の含んで得られなかつたものをも纏めたとも云へた。あれだけのものを子規一派のなから出したことは虚子の偉さにちがひなかつた。可憐な誠の風流人左千夫の野菊が生れ、漱石の猫が出、寫生文の埋肥が鬱然として莖と花と實にひびきをつがはしてゐた時、碧梧桐だけはもう一遍俳句の組立を叩きこはし、それを根本から編み直さうと考へ出した一人の人であつた。子規が建て直したものをもう一度革めて行きたいといふ考へを、その實行を内容素材から打ち込んで行つた。最近日本には珍らしい俳人魂たましひをもつた人であつた。その仕事はどういふ結果を彼に結び合せたかは別として、その勇敢と熱心さは僕を畏敬させた。そして結局古い寺院をこはして新しい材木で繼ぎ合さうと試みた彼の大業は、敗北せざるを得なかつた。僕は日本俳句の字餘りの驚くべき變つた形式のなかで悶えた彼を、わき道のなかにゐる彼をしみじみと悲しいくらゐに打ち眺めてゐた。美しい發句道の何とも云へない微妙な十七字形式を叩きこはすことは、可憐な田舎娘を脅してゐると同様な苛酷さを感じざるを得なかつた。

僕が金澤にゐた二十ところに碧梧桐の破調の俳句が天下を風靡してゐて、その六朝の書法とともに殆、日本全國を新傾向の句調が席捲して行つた。碧梧桐はいい氣になり僕らの金澤にも行脚して來て、僕は歓迎會に出席（勿論末席の方にゐたし五六十人の出席者がゐたから、さういふ歓迎に慣れてゐる碧梧桐に記憶などあらう筈はなかつた。）そして此の一代の風雲兒をひそかに觀察した。彼は何か聲の太いやうな巖丈な男で、床の間にゐて運座の選句を嚴かに行ひ、寧ろ目に地方俳人に應酬してゐたが、さういふ間にも地方人が短冊色紙に何か書いてくれと煩さくせがんだが、別に厭な顔をも見せず片ツ端から染筆して、田舎俳人の憧憬の情を失望させることはなかつた。餘りに氣安に引受けて慣れた手つきで書いてゐるのが、その人がらに好意を與へた位だつた。僕のやうな駈出者なら即座に颯め面をして見せるに違ひないところを、彼はあるかないかの程度の氣重さを鳥渡見せるだけであつた。併し僕はやはりその何となく偉さうなところ、田舎人がさうあがめてゐるところがとても敵はないやうな氣がした。

停車場へは時の警務長だつた青嵐、永田秀次郎なども傲然と新しい越中桐の馬鹿々々しい大きな下駄をはいて悠然と見送りに來てゐた。僕もさういふところに出かける馬鹿者だつたから文字通り平頭して、二等待合室にゐる彼に挨拶をしに行つたものだ。ともあれ碧梧桐が地方で歓迎と敬慕を擅にしながら行脚をつづけてゐるうちに、日本派破調、むしろ碧梧桐調が津々浦々まで行き亘り、

間もなく井泉水派の別派も出たけれど、彼の大業は子規が一度建て直した蕪村調を天下に行き亘らしたとは別様な意味で、笛太鼓入りで宣傳されて行つた。子規の蕪村調は水が次第に土をしめらしてゆく靜かさで完成されて行つたが、碧梧桐はそれを模倣してゐる俳人自身すらも、一たい俳句といふものがこんな字餘りのものでいいものだらうか、おれだちはこんな俳句を模倣してゐても、またどういふふうに変つてゆくかも知れない、併しおれだちは此の破調がいやになつた時分に又別の傾向が興るかも知れないから、それまでは難かしい問題などは考へないで置かう、——斯ういふ考へは誰の頭にも用意されてゐた。一たい俳句の詩形をあれほど自由に勝手に毀す必要はなかつたのだ、自然の滑かさをそのまま心に受け止めて表現することはよいが、詩形を故意に打ち破る企てはその作用だけでも發句道の精神を悪くするものであつた。字餘りの極端なのは二十七八字にもなつてゐて、これなら詩とどれだけでも變つてゐないやうに思はれた。

碧梧桐の全國行脚もかういふ革新的な傾向を残しただけで、何等内容的な發句精神を高めたものにはならなかつたが、併し彼には何か何時も悲壯さがあり圖抜けた大きさがあつた。僕はこれを此の人のなかに認めることにいつも愉快を感じた。しかも虚子が再三口を酸くして芭蕉よりもおれの方が偉いよ、などと云ふ無邪氣さは俳人といふものが奈何に不思議な自信を持つてゐるものであるかを感じざるを得なかつた。今日の小説家の中でおれは西鶴よりも偉いとか、西鶴よりもおれの書

くものが本統だといふ作者はゐなかつた。虚子が芭蕉の發句よりおれの方がうまいといふ内容には、俳人のいかにも機嫌のよい子供らしいところが窺れないでもなかつたが、僕はそれを俳人だけにある己ぼれであつて、俳人はそんな古くさいものを早く退治すべきであると思ふ。

誰かざる朝の渚をあるき貝拾ふ

碧梧桐

島に住めば柑子澤山な正月日和

同

焚火してあたるひるごろの木口そろひぬ

同

橋來る恰好が似るとて女朝眺め雪

同

師走の柿奈良よりとどく雀しいて

同

猿飼うてゐる赤い紐などつけて苔に

同

今宵泊らん脚いたはり紅葉濡れるつ

同

春寒や砂より出でし松の幹

虚

嘲りの高まり終り静まりぬ

同

露の幹静かに蟬の歩き居り

同

何の木のもとともあらず栗拾ふ

同

桐一葉日當りながら落ちにけり

同

碧梧桐の句のなかで比較的わかりのよいのを抜いてみたが、やはり彼の運動にも眞實のあつたこ

とは今日になつて見ると解るやうである。虚子が迷はずにホトトギス派を盛り立てて行つたところにも業績は充分に認められるけれど、碧梧桐が困難な仕事を突き抜けて出たところは俳壇の革命兒としなければならぬ。

四 俳句が短くなる

碧、虚二家を中心にした大正年間では、茲に一々の作家を論ふ枚数はないが大體に於て素直な俳句の姿を持つ青々、蝶衣、月草、蛇笏その他の作家らは、それぞれ目立たぬながらその道の微妙な繕りをしてゐる。別に大きな動きもなければ革新の實も上つてゐないことを見ても、碧梧桐のごとき人物はそんなに澤山に出るものでないことも解るのだ。併し彼のごとき人間が、度たび出て俳句を叩きこはされては堪つたものではない。

井泉水は碧梧桐とは別の自由詩の唱導者であり、その驚くべき根氣と熱心とは僕でも參るやうな氣がした。内容律のやかましい割合にその中身に動いたものを見ない、破調は僕の不賛成のものであるから茲では云はないが、只、彼のごとき渝りなき熱情はちよつと誰でも持てないものであつた。

碧門の一碧樓は内容が比較的ゆたかな方であつた。「河原蓬が枯れて逢はぬいちにち」雲のうすら

「雀巢立ちたり」など、井泉水よりもきめの細かさを持つてゐた。和露の詩形を詰めて行つた含み
ごゑの感じを持つ句調は、自ら一家を爲してゐると云つてよい、「手ぐるまとんぼつるみけり」とか
「をみなへしかるかやは刈りし」とか「けさの焚火を遣はしとる」とかは僕に近い詩境を感じさせ
た。碧梧桐、井泉水の作品よりも、僕はこの短かい詩にある温かい柔らかさを慈しみたい氣持をも
つてゐる。字餘りの訣の分らない俳句よりも蜻蛉の尻切れのやうな短かい方がわかりよく、内容も
籠つてゐるやうに思はれた。俳句は長くなるよりも短かくなければならぬ、短かいほど腹のな
かの呼吸を複雑にしなければならぬ、短かいほど優美に中身を一杯につめて行かなければならぬ、
中身をごちや／＼にならべる碧梧桐はもう一度革めなければならぬ、繰り返していふならば、これ
からの俳句は短くなることに未來の使命と約束をもたなければならぬ、さういふ大膽な表現で
再び世界の藝術のなかで微妙な特異な存在として彼をあらしめねばならぬのだ。短かくなれ、そし
て僕は未來の俳句は五字か六字くらゐで、完全に表はすものを表はして行かなければならぬと思つ
てゐる、五字か六字ではなく或は二字か三字さへも何物かの感じを出して行けることゝ思ふ。

それらの未來の俳句藝術は、連作の形式で五字六字の一句のものが、或は小説繪畫彫刻音樂の諸々
の藝術を含めて大飛躍をする時があるやうに思へるのである。碧梧桐は冷却してゐるし虚子は萎え
てゐるやうなことは、もうどうでもよいのだ、そんなものは考へることさへ懶^{おろそ}くなるやうな時に、

僕はもう一度何か新しい俳句に飢ゑてゐるのである、しかも僕は俳壇の外側にゐて大して解つてゐ
ない男であるが、僕は讀みたい望みを斷つことが出来ない、何か僕らの生きてゐる間にもう一度俳
句の委が、僕の空想してゐるやうに短かくなつて行つたところに新しく興るものを豫感せずなら
れないのである。反對に俳句が長くなるといふことは最早絶対に俳句を滅亡させるものとして、こ
れを嚴格に避けなければならぬのである。

發句道襟記

一 井月

明治の初頭、信州伊那に井月といふ俳人がゐた。背丈が高く頭が禿げて何時も瓢を提げて、村落から村落を渡り歩いてゐた。人々はこの異様な瘦軀餓鬼のやうな井月を、乞食俳人と呼び又は發句の先生と呼んでゐたが、普通の乞食などと異つた或る親しみを持つてゐたことは、彼が發句をつくり能書である上に、何やら學問のありさうなことから、自然に懐みのある眼を以つて見てゐた。

勿論、井月は酒にありつくと、嬉しさうに手を叩いて「千兩々々」と云つてゐたが、それは一面には磊落さうに喜んでゐるやうに見えたが、その言葉のなかに何か彼が自分自身を嘲笑つてゐたことも、考へられないでもない——六十六歳の永い生涯は殆、酒あれば酒とともに暮した生涯だつた。勿論、彼は半紙や短冊に發句を書いて、その謝儀に酒を饗應されると酔うて寝てしまふ。さめるとその家をぶらりと出て心當りの家に行き、そこで又酒と食事とを與へられると、其處から出て日が暮れると神社や肥料小屋の片蔭などで野宿するのである。もとより襤褸と虱と垢で固まつた正眞の

乞食同様だつたに違ひない。

或る家で寒さうであるからと綿入れを着せてやると、途中で彼よりもつと酷い乞食に會ふと、その綿入れを呉れてやつて自分は平氣で歩いてゐた。また或る家で貰つた菓子なども路傍に戯れてゐる子供にやるとか、または次の家に持つて行つて置いて行くとか、さういふことは井月の身上となつてゐた。

彼は村人から先生と云はれてゐたことは、その美しい能書に因をなしたのであらう。今も残つてゐる井月の短冊や掛物はこの人がボロを着て酒と飯とを他人の門邊に求めてゐた人とは思はれない流麗さである。同じ流浪の生活をしてゐた加賀の北枝なども酒ばかり呑んでゐた元祿の俳人であるが、その筆蹟の確かりした美しさには少しも卑賤のあとがない。井月も同様、その筆勢の流暢さは見事である。信州富縣村福地の村社に井月選句の自筆の奉納俳句の額があるさうであるが、却々立派な出来栄であるさうである。これを揮毫した時も二三行書いて酒を飲み、そのまゝ寝込んで又起き上つて書き續けてゐたさうで、村の肝煎役も業を煮やして急がしたが、やつと八日目に書き上げたさうである。

はる雨や鏡に向ふ晝旅籠

この句などは彼の生活にあるのんびりした氣持の表はれたものであり、苦しい放浪の暮しのなか

でも、かういふのんびりさを愛せずにはゐられないものが、素直に厭味なく出てゐる。

帯目の少しは見えて別れ霜

別れ霜といふのは春になり暖かくなつたあとで、もう一度不意にふる霜のことを、別れ霜といふ意味で詠むのである。門の前は春光行きと書いて毎日掃かれてゐる跡が見えてゐるのに、今朝は霜が降つた。これは此の春のおしまひの霜であらう、さう見れば永い冬の退屈さも思ひ出されて、懐かしいといふ程の微かな意味を込めて詠んだものである。

何處やらに鶴の聲聞く霞かな

明治二十年二月十六日に六十六歳で病歿した辭世の句であるが、また一説には此句は晩年の作であり、次の句が辭世の遺句ともされてゐる。

落栗の座を定むるや窪溜り

此句は前の鶴の句にくらべて、いかにも井月の流轉の生活が内容となつてゐるやうである。その病歿の二月十六日は残雪に餘寒の酷しい日であつたが、凍て上つた稻の切株の鋭い田の畦のきはに、井月は俯向きになつた儘行き罷れてゐた。往來の人は例に依つて井月先生が酔うて倒れてゐるのだと思つて、呼んで見たが動くことも返事さへもなかつた。肩に手をかけて見ると憔悴した病顔には既に死が領し盡してゐた。

「何處やらに鶴の聲聞く霞かな」の上品で氣位のある句風は、全く芭蕉などが用ゐた調子であり内容であつた。井月が此の芭蕉の道を歩いたことは、彼としては當然であり井月を一層よくしたものであらう。

「落栗の座を定むるや窪溜り」恰も死後を豫言したものであるやうに思はれた。彼の死體は知人から知人へと戸板で持ち廻され、最後に有志の手によつて埋められたのである。併乍、爾來五十年、その零碎な遺墨ですらも市價が出たのには、生前乞食といはれただけにひそかに墓下で井月は苦笑してゐるであらう。

二 阜月の蠅

芥川君の句に「庭土に阜月の蠅のしたしさよ」といふ作があるが、これは澄江堂の句中でも秀逸の發句である。蠅を整うた庭土の上に見ることは、蠅さへ清まる思ひがするものである。何日か夕方方に坐つてゐて蠅がどうしても僕のそばを離れず、それを捕つて殺すことも出来なかつた。それ程、夕暮の蠅は魔のやうに變怪出沒してゐた。しまひに一疋の蠅のために愚かな僕は、激しい怒りを心頭に感じた。何處からどう行つて姿を隠し、また現はれて僕を怒らす蠅だか全く恐ろしいくらゐだつた。僕はしまひに蠅が馳驅する青馬のやうな氣にさへなつた。

僕はまた淋しい気分を感じ出したときに、蠅が僕のまはりに煩さく憑きまとうてゐて、時々その蠅の羽鳴りに氣を奪られてゐたが、そのとき蠅が僕の淋しい考へにもたかつてゐて、それを汚ない口で食ひ散らしてゐるやうな氣がし、ひどく憂鬱になつて來たことがあつた。僕の考へは蠅のたかるくらゐ汚ないものかも知れないが、僕は夏の日の路傍に突然に立つ數十疋の蠅の羽鳴りを、適かに僕の考への上にも感じると慄乎とするくらゐであつた。

僕は蠅を見ると、庭土に早月の蠅のしたしさよの句を思ひ、清風立ちどころにそよぐ感じがするけれど、僕の考への上の蠅を趁ふことができないのである。

僕は或日信州碓氷の頂上に近い道路をあるいてゐて、獨活の花が咲いてゐる美しさに見とれてゐた。八ツ手の花をもつと小粒にしたやうな花で、人氣のない若木の繁みに咲いてゐるのが、却々に清い感じがする。そしてよく見るとその花のまはりに一杯の蠅が群かつてゐた。深山幽谷にゐる蠅は人家市井の蠅とちがつて、花の蜜を吸うて生きてゐるかと思ふと、蠅と雖も生息するところさへ清ければ清い生活をすると思つた。都會では溝水を吸うてゐても、深山では滴る清水を吸うてゐるのである。

一茶の句に故郷を厭うてふるさとは蠅さへ人をさしにけりといふのがあるが、一茶の中でも皮肉と悪罵とに充ちた發句で、これほど郷里を酷くとき下ろした文學はなからう。何時か泉鏡花さんに

おあひした時に郷土の風光や風俗を好んで話して居られたが、談、たまたま人情のことにすゝむと、手を振つて厭うて云はれた。

——どうも金澤は好きだが、わたしは金澤の人情といふものが嫌ひでしてな。

僕も鏡花先生と同様、金澤を故郷に持つてゐるがその人情の微にいたると先生と同様好きでなかつた。それは飽迄富者を尊むといふ風習があり、僕など無名のときは誰一人あつて對手にしてくる者がゐなかつた。少し餘裕があるやうになると先の人もやつと話してくれるやうになつたのだ。さういふ風俗人情は強ち金澤人ばかりではなからうが、一茶と同様に蠅さへ人を刺すと云はざるを得ないのだ。鏡花さんはだから何時もこつそりと金澤の旅籠屋に泊つて、晩春の幾日かを故郷で過ごされるさうである。

同じ郷土の先輩の徳田秋聲さんなども、食物や風土を愛して居られるけれど、人情といふものを愛して居られなかつた。時とすると鋭く罵倒されることもあつた。僕などもすきな時に金澤の旅籠屋に行つて泊り、よく眠つて春秋彼岸の時をすごしたいと思つてゐても深い血縁の人情のなかにはいつたり、人と人との面倒くさい間に禮狀を交したりすることを考へると、鳥渡旅行する氣になれなかつた。

それよりもいつそ人の知らない土地に行つて、新鮮な人情風俗を味はうてゐるほど太平なことは

ない、少しも知らない人情といふものはそれ自體にさへ興味の起るものだからである。

三 歳末

芭蕉の俳句集を讀んでみて、一たい芭蕉といふ人の俳句で「さびしさ」といふ言葉を挿んだ句がどれだけあるか、それは尋ねるともなく見てみると、可成に多いことが分つた。芭蕉はさびしさを食ひちらしてゐたことも本當である。あのくらゐ發句のうまい人でも、さびしさといふ實感にゆきあたり、まさしくその「さびしさ」といふ言葉をつくつた句に餘りよい句が見當らないやうである。

さびしさや釘に懸けたるきりぎりす

さびしさや須磨にかちたる瀨の秋

さびしさや花のあたりのあすならう

さびしさや湯守も寒くなる儘に

淋しさよ右も左もわすれ草

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

このなかの「さびしさや花のあたりのあすならう」などは、寫實的な句であつて變なさびしさが出てゐる花のあたりのあすならうといふ實情は芭蕉以外の人ではちよつと味ひを出せない句であ

る。「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」などと呼び込んでゐるさびしさは、僕には向かない興味のない句である。うき我といふやうな對人的な氣質はよくわかるが、そこまで對人的でなければならぬことはない筈である。芭蕉のくせの出でゐる句であつて好かない。

芭蕉といふ人は構へてかかつた作句にはあまり成功してゐなくて、比較的の苦吟しないやうに見える單純さうに見える發句は大抵よくできてゐるやうである。一句を幾日でもかかつて捏ねくり返す芭蕉はさういふくせを作句の上にも、材料のうへにも充分うかがはれるやうに表はしてゐる。僕は芭蕉でも單純なときの彼が好きである。

その他に歳末の句に芭蕉が町に線香を買ひに出る句がある。人々が忙しげな生活に逐はれ埃の立ちまよつてゐるなかに線香を買ひに出るといふところ、清い静かさがこもつてゐる。かういふ氣持は芭蕉でないとうまく發句の本當に行き當れない。

僕など歳末になると金のことを考へるが、反對に賑やかな町に出て行つて賣出し廣告の音楽などをきいて、一人ぼんやりと家にかへつて来るがその氣持もなかなか淋しい。國の方で或る年の暮れを送つたことがあつたが、その折に花のすくない北國地方のことゆゑ僕は小粒な實のなる花がはりの枝などを購うて、冷たい雲のなかをかへつて來たりしたものだ、東京ではさういふ悠長なことをしてゐられなかつた。いつも出入のはげしい金錢俗事のあひだから、庭の樹の肌が雨にぬれるの

を見て歳暮の感のふかいことを思ひやるくらゐであつた。年末ごろになると枯木の枝が美しく、朝など濡れるとその日いちにち潤うてゐていい色をしてゐることがあつた。僕は年末になるとそんな庭のありさまなどを眺めてゐることが多いのだ。それより外に僕の年末の感といふものがあらう筈がない。

僕は子供の折には年末になると新しい下駄を購うて貰ひ、それをていねいに正月の來るまで取つて置くのであるが、それなどは却々に楽しみが深かつた。時々下駄箱のふたをあけて中を覗いて見れば、何か親しい感情を感じ、正月といふものを楽しく喜ばしくおもつたものである。だから子供にはできるだけ年中行事のことを教へてやる代りに、それらの贈り物などを怠らないやうにしてゐる。自分がそれを喜んだ時分があつたやうに子供にもさうして喜ばれたためである。さういふ意味で親といふものは子供の時分のことを、子供がゐるやうな頃にもう一度経験してみてもいいのだ。自然に子供をまん中に置いて色々な幼少な折の氣持になることもあり、またその氣持を踏んでみることに依つて、新しい父母の道をひらいてゆくのも、これからの父母の責任でなければならぬのだ。

四 「さびしさの底」

僕が詩を書くのは、無理にいへば内藤丈草の「さびしさの底ぬけてふる雲かな」の氣持であつてもはや二十代の時分のやうな詠嘆の心境ではない、どうにもやりきれない時に詩をかく、何か心に引つかかりのあるものを残して置きたくなるのである。人間はいつも何か心に引つかかりを感じ、愁を感じてゐるもので、その愁をそのまま打つちやつて置くわけにゆかない、それを自分の心にだてて見るときに、詩がほしくなる、そつくり詩にあらはして見てほつとする、小説にかくことができないもので、小説以上に心にはたらいてゐるものがある場合、僕は詩に手を伸したくなる。詩では人にはなせない恥かしいものすら現はすことが出来るし、それがあつたために僕は詩を愛することが出来る。丈草の「さびしさの底ぬけてふる雲かな」は發句の道を行きついた心境であるが、めぐりにめぐり抜いた氣持である。これ以上深くなるといふことは却々むづかしい、俳句よりも詩が派手であるといふことはうそである。詩は本來もつと發句から見ると深くなければならぬのだ。それこそ寂寞の底を抜けて出なければならぬものなのだ。

詩は日本では大抵若い人がかいてゐる、四十近くなると詩が他愛ないばかりかばかしいものに思はれてくる、つまり詩にも二十代の詩もあれば三十代の詩もあり四十代の詩もなければならぬし、五十代の詩すらある、しかし四十代で詩をかく人はゐても五十になると大抵書かなくなる、何か詩とは別な氣持に出會ひ、詩が詩の處女性を感じなくなる、硬張つた氣持であり柔らかな氣分が出てこ

ない、遂に詩を擲つやうになるのである。丈草の底ぬけてふる霰かなの氣持、さういふ烈しい沈潜された氣持を詩のなかにひそませることの不可能をかんじるのだ。やはり詩は若いうちの形式のやうに考へられてくる、それはさうであるにちがひないが五十代になつて来て見て始めて豁然と開かれる詩があるにちがひないのである。そこまで根氣よく氣持の初々しきをもつて戦ひをいどんでゐる人がゐない、さういふ詩術の戦ひをそこまで打ち込んでゆく人は、天下に一人か二人くらゐであらう。高村光太郎氏などはさういふ老境を叩き割つて、なかから詩の腸はらわたを抉り出す側の人ではないだらうか、高村氏ならば行きついても突き破ることのできる詩人であり、さういふ巖丈な骨格を有つてゐられる。そこに丈草が新しい意味をもつて別に現はれてくるやうに思はれるのである。

俳句の精神が枯淡幽寂であるといふことは信じていいことだが、詩がそれと同じ標準を目ざすことは絶対にありえない、只、いままでの詩は大てい西洋の詩のあと廻りしてゐる場合が多い、西洋くさい詩を既ういい加減に打ちやつてもいいのだ、日本の詩には日本の特質から生みつけられた詩があつてもよい、踏み込みを新しくして出直してもよいのだ、さういふ別の丈草境には入り込んで見たら、支那の詩のやうに立派な日本の詩の新しい城が築き上げられるかも知れない。支那の詩が萬里の長城をきづいてゐるにくらべて、日本の詩はとうていそれに及ばない、只、俳句が支那の詩と向ひ合つて元祿から明治までの俳句城を築いてゐる、これは立派に支那の詩と太刀打ちがで

きるものであつて、新體詩として五十年の歴史しかもつてゐない詩にあつては、とうてい支那の詩に及ばないのだ。内容が自然の表皮のみを素材としたものや、小學生くさい感傷主義の作品ばかりでは、とうてい支那の鐵壁のやうな詩には叶はないのだ。それは詩人がみんな餘りに若くて、詩が生え立ての芽のやうに可憐過ぎるからである。氣持や考へや思想といふものが確かり固まつてゐない時代の作品だからだ。僕のいふ四十代や五十代の詩が必要であるといふのも茲に意味をもつのだ。詩が青少年時代に發芽してその時代にのみ成長するといふことは心ぼそいのだ。

僕の二十代は殆、詩ばかり書いてその若い時代のあへぎを綴つてゐた。ちよつとした自然の移り變りに注意深く氣持が奪はれて、それがすぐ書きたくなるのだ。表現を持つてゐる人間は藝術形式の相違はあつてもすぐにそれに従くことを考へる。その表現といふものがまるで肉體が生活してゐると同じいものになつてゐる。見ると表はすあひだに些しも隙間がない、小説をかく人間はどういふ場合にも小説の洗禮なしに人生を見透せないごとく、凡てが小説の世界に見えて來るのだ。ある音楽家は何んでも音楽の形式なしには見たり考へたりすることができないと云つてゐるが、音楽の場合は一そう眞實であると考へざるをえない、音楽家はピアノにじやれつくごとく詩人は詩にじやれつく、詩も詩人にじやれつくのだ。

僕は二十代に萩原朔太郎君と本郷の下宿にゐて、日として詩をつくらざる日になかつた。萩原君が詩の原稿を見せてくれれば僕も原稿を示した。ちやうど本郷の根津権現の境内の若葉時分だつたので、原稿紙まで誇張していへば若葉の美しさを讀へてゐたし、ちよつとした行きすりの麗人にもところを動かしてうたつてゐた。恐らく僕の詩をかいた時分であのころほど馬鹿馬鹿しい純粹さと、氣狂ひじみた情熱をもつた時代はなかつた。しかし到底丈草の「さびしさの底ぬけてふる雲かな」の境致などに到きさうもなかつた。まだまだ遠くの方にぐづつき廻り途をしてゐた。同じいさびしさを衝いてゐても丈草の年輪を経たものにくらべ、迥かに巫山戯てゐると同じい廻り遠いものであつた。それに僕らの「さびしさ」は底にゆけなくて大抵孤獨をわび、女こひしさのためであつた。あのころの僕の心を領した女人といふものはとても美しいもので、それを憧れることが生活からも詩からも同じい標的をもつてゐた。つまり僕の考へを驚つかみにして見ると人生に詩を得るか、女人を得るか、の、さういふ微妙ないたいたしくも馬鹿々々しい考へをもつてゐたのである。詩と女人といふものを結び合せて、どこまで詩が詩だか、女が詩だかのはつきりした區分さへも持つてゐなかつたのである。もつとこまかに云ふと、詩をかくといふことは女人の何かに觸れ、女といふものへの心のうごきを表はすものにすぎない、——さういふふうに考へてゐた。その時分の詩の大家であつた三木露風君の詩の一章に、「いかに戀しかるべきをんなよ」といふ詩があつた。誰の

詩を見ても處女詩集の前後はきまつて女人を讀へる詩か、それに憧れる詩か、または直接その肉體の美しさを内容としてゐる、日本ばかりではなく西洋の諸詩人も同様に女の内容を素材としてゐる。これは若い時代の純粹な嘘のない氣持からさう唱ふるやうになるのである。

與謝野晶子女史が大抵の詩人——つまりその時代の流行詩人であつた北原白秋とか木下杢太郎とか高村光太郎の諸氏がみな孤獨の詩をかく詩人であつたために、もつと若い女性は詩人と交際した方がよいと激越して書かれたほどであつた。それほど詩人は孤獨の人が多かつた。萩原君の詩にも孤獨の詩がたくさんあるが、僕はほとんど孤獨を嘆く詩ばかりかいてゐた。別の意味で孤獨であるためにその嘆き憧れをつづる詩が必要であるのであつて、さうでなかつたら詩の形式は僕らに不必要であつたであらう。

僕は大抵詩を朗讀しながら書いてゐた、詩がうたひやすいやうに書かれる意味よりも、やはり口ずさんで書いてゐると淋しい時は淋しいリズムを漂はしてゆき、悲哀をつづるときは自ら悲哀の調子を湛へてゆくからである。音楽家が作曲するときにピアノを敲きながら音階をしらべるやうに、別の意味で畫家の繪具であり彫刻家のノミのやうな役目さへつとめてゐるのだ。

我々の言葉にあるニュアンスは、うまく文字のあひだにあぶらをさしてくるからである。それを書き當てるには、心の中でしづかに朗讀した方がいい、もう一つは左ういふ心境にあるときは朗

讀することによつて、何か切ない氣持をまぎらはすこともできるからであつた。すくなくとも人間は何かしらしやべつて居ること、氣持がらくになることがある、ひとり言といふものの特質のなかに孤獨がうづまいてゐるし、詩人といふものもそのひとりごとのなかから何時も何かを搜り當てなければならぬものであるらしい。詩人が詩をかいてゐるあひだはしやべつたあとの氣安さが感じられる、しやべりたくて仕方がないときにそれを云ひ表はした時の氣持のはれしきも、やはり詩をかくときの快樂に似たものかも知れない。

發句

自分には發句も小説も別に變りが無い。變りがあると思ふのは發句が十七音の固定詩だといふ古い言草であらう。

發句と變りのないのは、その内容の人生が變らないといふことである。その心のにらみや構へ、凝氣の點に至つては發句の中の人生は呼吸苦しいくらゐだと言つてよい。我々がその自然や人生に立ち對ふ時、心を搔き上らせるときには、雲烟裡の人であるよりも物すごい人生の中に立ち竭してゐるやうである。我々の心の向き方で、青い竹の幹が豁然として割れるくらゐのことは、何時も経験してゐることである。

併乍ら俳道に入つたことのない人には、この心持を傳へることはできないかも知れない。或は又俳道にある人でも、この氣もちを會得しない人も尠くないであらう。要は彼らの心のにぶつてゐるか、さめてゐるかの相違だ。心のにぶつてゐる人は俳道に行き着けないと云つてよい。

自分は好きであるとか、楽しみにしてゐるとかいふ意味で一句の發句を作つたことがない。作り

かけることは矢張り頭を疲らせることである。際限もなく深入りをして行き止まることを知らないのである。發句の奥の方には何時でも行きつけない、その折々の心もちで奥へ行けないこともあるのだ。すごすごと引返す自分の未だ^{いた}疎らない姿を見ることが寂しいものである。自分はこの寂しい氣持を絶えず繰り返してゐる。

静さ

自分は時々發句を作るが、このごろでは發句を作るよりも、その前の氣持の準備といふやうなのが非常に親しい氣がする、發句でも一つ作るかなといふ氣分ではなく、これを發句に書いたらよいなといふ氣もちである。

發句に書かうとする材料で、句にも表はされないでしまふことがある、惜しいがそのまゝ忘れてしまふ、さういふ心を一度通りぬけたものが、再度と心に浮かばないでゐるくせに、やはり心残りがしてゐる、私はさういふ心の境を喜ぶのだ、俳三昧といふものは俳句ばかり作つてゐることではなく、さういふ心が絶えず作者のからだのまはりに漂ふてゐることをいふのだらう、そのために作者の心はいつも清い静さをもつてゐる、それを私はいひたいのだ。

今の世に心の静さを保つことは、何よりも仕合せなことである。騒然たる東西南北の彼方から、一脈の清風を搔きおこすことは何といつても、その人の徳の致すところであらう。往昔の俳境はとくくそれであつた。今の世の俳境は一層その静さの必要を感じる、——蕉翁の時代の世とはち

がひいまは身心の疲れる時代である。こんな世に静さを誰よりも多く持ち得るといふことは何よりも有難いことである。

静さは真心のあらはれで、人間の一等よい性質がこだはるところなく、現れてゆく謂ひである。どんな詰らない人間でも静にしてゐるときは、中々殊勝なものである。子供でも静なときは、よけいに物事を考へてゐるといつてよい。子供の静さは考へぬいてゐる静さである。かれは自分で静にしてゐながら、その静さに驚くことさへある。それは彼自身ですら豫期しない或る新しい考へに驚くからである。

自分は今のところ別に發句を作らうとはしない、むしろその空氣の中にあることが楽しく、卑しいことから遠ざかる思ひをすることが尊いからだといつてよい、漱石は晝間小説をかいて俗塵を感じ、晩には漢詩を作つたさうである、この意味で自分の發句もまた文界の塵を離れる思ひがするからかも知れぬ。そんな意味で自分の俳境を悪ざまにあげつらふ人はなからう。――

俳道

自分はこの頃詩を書いて見ても段々短くなつて殆三四行のものしかできない。呼吸が以前のやうに永くつゞかないで、たまに書くものは發句のやうな詩になつてしまつた。それなら發句を書いてゐたら、よさうなものだが、やはり時折詩が書きたくて書いてゐる。しかし發句とは、別に變つたところがない。自分はもう詩なんぞ書くよりも發句でも書いて、折々の閑雅の心遣りをしてゐた方が餘程よいと思ふやうになつた。そして若い人たちの詩を見るとやはり自分の書いて來たことが繰り返されてはゐるが、どこかに變つた心もちや色があらはれてゐる。

そしてわたくしにとつては詩も發句も同じいものにならうとしてゐる。詩が何となく西洋風であるに較べ發句が古雅な傳統の上に建てられてゐることも、わたくしには新鮮な詩情であつた。わたくしに取つては發句が單なる發句ではなく、詩を捨て、この道に入つてゆくことは、やゝ微かな悲壯の感じがしないではなかつた。詩は幼年のわたくしを育てたが、發句は青年中期のわたくしにふたゝび新しい道草をつませてくれるのである。自分は詩に飽かないうちに書きたくなくなり、發句

の精神は氣質からすでにわたくしに向いてゐるやうである。それゆゑわたくしの發句は私一人にとり、中々重要なことで、たゞの閑暇つぶしや餘技の類ではない。すくなくともわたくし今の年齢での何も彼も籠らせたものでなければならぬ。形式は古くとも悟人の新奇さに驚き勇むころは、過ぎし日の詩情をさへ捨てた壯烈きをもたなければならぬ。まして世上一介の俳人として立つことを潔しとせぬことは無論である。

芭蕉のさびしをりを慕ふてもわたくしにはあゝいふ暮しはできない。あゝいふ暮しは芭蕉だけに亡びていゝ生活である。たゞわたくしの考へることは發句でも書いて、それに暮しを支へるやうな収入があれば、むろん私はその生活に従くだらうといふことである。だが今の世は句作でくらせる譯のものではない。蕪村でさへも繪を畫いて生活の資を得て句作をしてゐた。わたくしは悟人の暮しをする前には充分に世上との應酬をもしなければならぬ。さういふことに慣れてゐるわたくしには何でもないことである。人は好きに心を馳せるためには仕事はしなければならぬからである。わたくしは古色蒼然たる一句を愛してゐる。古いほど新しい句が好きである。それゆゑ、いまある新傾向といふものに不賛成で、自分一人の意向としては蕉門の風習を佗びることを望んでゐる。かれらのねらひはさすがに二三百年の向ふを睨んでゐた。動かない所に居たことは今日芭蕉、丈草、去來、嵐雪、または蕪村、一茶などを駢べて見れば判然とする。ともかくかれらはそれ／＼に違つ

た氣もちにわたにせよ、睨みの中に一本の道がすつと今まで續いてゐたことは、彼らの身も心もそして己々の道を磨くためには、みなさびしをりにかゝつたゝめでなければならぬ。にらみにさへ永い將來の遠きを見てをれば、詩も發句のあたひも矢張り持ちこたへるにちがひない。眼前餘多の粗景に軽々と心を動かすことは考へものである。

金澤に一年のたごころに風呂に入りながら、屋上を敲くあられの音を聞いたことがあつた。風呂桶に沈み込んでゐると二粒三粒、煙突の穴から落ちて来て、仄暗い灯に冴えて見えるのが、發句めいた風景で忘れられなかつた。冬の日の黄ろく濁つたのが障子に射す東京の我家の風呂場にくらべれば、どれだけ冬らしい氣もちだつたか分らない。

自分は前栽に一つの笥を引いて一滴の音を聴いてゐるが、水音といふものは春よりも夏秋のそれよりも、冬深く葉の落ちたところに聴いてゐると、一層の閑寂さが感じられるやうである。火桶を擁しながら賣文の埃をあび、喘ぎながらゐるときに水音を聴くのは一種の清風を身にあびるやうなものである。しかも今朝は池の上に氷が張り寛さへ凍りかゝつてゐるが、水音は半ば潤れながら落ちてゐる。池中の魚は姿は見えぬ。笹の葉はその縁が枯れて蕭として霜をあびてゐる。自分は俳道といふものゝ姿を見たやうな氣がして氷の融けるのを待ち佗びた。俳道の底にもこれらの一滴が落ちて四方枯れた野山に通じる一本の笥があるのではないかと思はれた。笥の水は温かく氷を上の方

から融かしてゐる。

今から思ふと自分が國にゐて冬の潤れた川原にちよろ／＼水の流れてゐる幽遠を考へると、まことに天下の冬を領してゐるものであつた。瘦せた山々からやつとしぼり出されたやうな流れが、果もなく續いて、白い石と石との間を縫ふてゐる。石の上にはみな雪をいたゞいてゐる。水は暗く音は寒い、——自分は俳道の底をさぐり當てた思ひで、何度もその景色を眺め讚嘆した。この幽遠をつらぬいてわたくしに何が走り過ぎたか。——わたくしは遂に何も考へないで歩いた。これらの風景は果して人間に人用なものかとさへ、わたくしは乏しい自らをかへり見た。

その時も考へたことは唯一つ俳道成りがたく、己の心至らぬことであつた。まだ、さういふ風景にしたしむには年齢が若過ぎはせぬかといふこと、風景にも年齢をとらぬと、入ることのできないもの、あることを沁々思ふた。風景はすでに百歳の上はひを帯びてゐた。あるひはもつと年取つてゐるかも知れない。かりにさうだとすれば私はあまりに若すぎると思へたのである。

詩と發句について

特に職業的俳人や即興的詩人の輩に依つて區別される發句や詩の單なる形式的識別は、自分には最早問題ではない、——自分の問題とするところはそれらの根本の嚴格さを引出すことにあるのだ。

發句といへば、さびやしをりを云ふのは、假令それらの言葉の存在があつても、直ちにそれに依つて片附けてしまふことは間違ひである。要は嚴格な、高い、登り詰めてゐる氣持を云ふに過ぎぬ。我々は我々の最高峰を攀ち登つてしまふところで、既う一度何物かを掻きさぐらねばならぬ。詩が感情的風景の域を脱してゐることは勿論、詩はそれらの上に立つ最早雲表的な氣稟の激しさから登り詰めた何者かであらう。——

遺傳的孤獨

元祿の作者の中で特に選ばれた文章や凡兆は芭蕉と共に自分らを打つのも、かれらの高峰が俗手の抵觸外に立つてゐた爲であらう。ホキットマンやヴェルレーヌの詩風は詩風の一存在として、特に僕らの青春を襲ふて共鳴してゐたのも、最早今日の僕らをしてたあいなものとして眺め飽きたのも、僕らの成人を意味する前に既に僕らが奈何に彼らよりも、より烈しい東洋風の孤獨とともに在ることに耐える、千古不拔の遺傳的詩人であつたか、想像されるであらう。

西洋人は遺傳的に孤獨の外の人種であり、性情に孤獨の巢をもたないやうである。稀れには露西亞人にある北方的憂鬱の氣質は、トルストイやドストエフスキイの器に盛られたとしても、東洋風な、淡さりした孤獨の城を建てることを知らない、——發句が幾たびか英譯されてゐながらその十分の一すら味ひ甘みあまを傳へることのできぬのは、民族の遺傳的風習や生活様式の相違ばかりではない「分りかねる」ものが未來永劫にまで「分りかねる」ことであり、解らうとしてもその解るべき性質を根本から失ふてゐるからに過ぎない。

花鎮

曲亭馬琴の「歳時記」に據ると「花鎮祭」といふのがある。解説には(『晦日(公事根源)』)是は大神狹井の二ノ祭を云と「神祇令」にのせたり『春花の飛かふころは疫神分散して、人を惱ます、故にかれを鎮んが爲此祭はあるとかや、神祇官にて行はる。』とあるが、花散るところの懊惱的な氣分が此數行に沁み出てゐる。路傍の童子等が様々な花を弄んで遊んでゐるを見ても、何か春花の巷に行き逢うたやうに賑やかな春を感じるものである。

猶歳時記によると花季を分けてゐる。「花ぐもり」「花錦」「花雲」「花瀧」「花浪」「花の鈴」「花笑」「花の顔」「花の姿」「花の肌」「花の粧」「花の唇」「花ぶさ」「葩」「花の輪」「花の宿」「花の窓」「花の戸」「花のころ」「花衣」「花の袖」「花の袂」「花筐」「花籠」「花皿」「花活」「花筒」「花瓶」「花車」「花見車」「花笠」「花蔓」「花の盃」「花空穗」「花筏」「花の隨身」「花造」「花むすび」「花宴」「花軍」「花薙」「花の繪」「花の都」「花をふらす」「花の踊」「花の縁」「花香」「花々し」「花鳥」「花散る」「花の主」「花あるじ」「花守」「花園」「花園」「花嫁」「花婿」「花の幕」「花の山」「花の雨」「花まつり」その他數へ立てたならばどれだけある

か知れない。

東洋人は花の匂ひにしても淡泊なものを好んでゐることは、傳統が證明もし詩文がこれを歌うてゐることでもわかる。西行や芭蕉、それから花の匂ひを厭ふ香道の諸禮式、茶人に於る淡泊主義、枯淡趣味がこれを歴史的に物語つてゐる。一つは我々東洋人の肉體にはさういふ烈しい匂ひが向かないからであり微妙と幽さをよろこぶ東洋の諸精神が陶器や服装の上にまで及んでゐることも解るのである。

蕝の羹

芭蕉の句に石を詠んだものは妙いが、蕝村には石の發句が可成にある。意識的に意力を打込んだ蕝村は、芭蕉よりも又別の意味で材料に格闘を試みた詩人である。芭蕉の場合には自然に熟したものが詩に盛上つて行くが蕝村は、素材に打つかゝる機會を自身で作つてゐる。元祿と天明のセチ辛さが此詩人の作爲に現はれてゐる。

こがらしや蟲の小石目に見ゆる

蕭條として石に日の入る枯野かな

蕝村は又可成に官能的な素材に強烈な憧れを持つてゐた詩人である。同時に彼は何處までも對照的な色彩を好愛する畫人の大成を作句の上に搖曳してゐる。

多ざれや小鳥のあさる蕝蟲

多ざれて蕝の羹喰ひにけり

これらの發句は生々しい昭和年間の作句かとも思はれる程、材料と表現が生々として浮んで來る。

天明の詩人は同時に既に正岡子規を抱擁してゐたことは、子規の學んで及ばなかつた蕪村道が彼一人で道絶えてゐることと分る。同時に蕪村の茫々たる雜草を分け入ることが未だ完全に爲した詩人はない。只、子規の迎つた道は假令行き盡せなかつたにしても、大丈夫の佛を持つてゐることは事實である。蕪村調を破らうとした彼の焦躁の氣持は、子規の生涯を通じて歇まなかつた情熱であつた。

蕪村も亦常に最も新しい詩人の峻烈さを持つてゐたことは、芭蕉の如く沈まずに絶えず蹴破つて出ようとする身構へ、絶えず何等かの新しい音樂的韻律を試乗しようとする憧れがあつた。單に調子を高揚させるばかりでなく、素材の方面や空想力の旺盛さが絶えず蕪村を驅り立てゝゐた。芭蕉は空想家の美や逸樂を知らない方だつたが、蕪村の逸才は何時も空想の中に奔馬の如く去來してゐたと云つてよい。芭蕉は凝乎と靜かさに凝り固まつてゐるやうなところがあるが、蕪村は何か膨脹してゐる徴か「大きさ」と「粗さ」があつた。彼は芭蕉以後の發句を建直し更に新しい發句道を築き上げる努力を忘れなかつた人である。世は天明であつても芭蕉調は亡び、天下の發句は依然として元祿のさびしをりの流れを汲んでゐた。蕪村はこれを樹て直し、彼の逸才を以て、或意味で根本的に蹴破る望を抱いてゐた。(彼が當時破調や新體詩の先驅をしてゐたことは、元祿調から出ようとする彼の身悶えの表れであつた。)

併し結局蕪村の頭の上は芭蕉の流れを汲み、その中で立ち上るより外に方法がないことを知つてゐた。彼の時代が未だ元祿調以外に出られないことを先見してゐたものらしかつた。さういふ蕪村は正しい蕪村だつた。彼の大成は芭蕉を蹴破らうとした努力と革新的なそれとなく、芭蕉をも彼の中に交へ融かせた正直さが役立つて、愉快な大成であつた。しかも彼は芭蕉の沈潜、靜寂から岐れて出た、珍しい「大きさ」を取り入れてゐた。彼の聰明さは矢張り彼の大を爲さしめる境致にゐたと云つてよい。(百數十年後碧梧桐氏の破調的な表現運動が起り、その成果はともあれ、さういふ運動を既に天明時代に暗示してゐたことは矢張蕪村が後代への睨みの利いてゐる所以を證左してゐる。)

蕪村は同時に何處迄も眞剣な生活者の悶えを持ち、妻を思ひ娘を愛する人情の中に呼應した詩人だつた。芭蕉の如く生涯妻を持たなかつた人と違つてゐる。體質的の相違はあつたにせよ、蕪村が畫人として生活の道を得て、亦生活者としての強い根深さをもつてゐたことは、後世の子規をして一層蕪村道に従かしためた所以のものであつたらう。芭蕉のやうに他人の生活費の喜捨によつて生活しなかつたことは、元祿と天明の生活様式の異つた點であるにせよ、斷然彼を重く大きくさせたものに違ひないのである。

畫人蕪村は同時に亦發句道の飛躍と鋭鋌を兼ねてゐた。大雅堂、應舉などと交友した彼は、併し

飽迄彼自身の俳畫の眞と姿とを後代に遺し、些かも滯滞なき放膽な畫布の中を往來した。發句も晩成である如く彼の畫風も亦晩成に近い。元祿の凡光に比較さるべき黒柳召波を發見したのも彼なれば、几童、月居を座右に見付けたのも彼である。十七字詩形を溢れ出た彼の鈍重と鋭敏とを兼ねた「大きさ」は酒脱の中に眞實を見付け當然、畫仙の中に行かなければならない。彼は、六十六年の生涯に近づくごとに晩成したのである。

餓人の發句

昔は自ら乞食俳人と稱して句作をし、町家に衣食の代を乞うてゐた者がゐたことは實際らしい。元祿の路通、明治初頭の信州伊那の井月などはその最も代表的なものであらう。渺くとも蕪村にせよ、鬼貫にせよ、また芭蕉にせよ、孰れも句卷の選料や短冊による報酬でなければ、自ら寄進の金錢衣服に依つて其日を暮してゐたものである。別に今の小説雜文家のやうに原稿料が所定されてゐた譯ではない。短冊色紙の類の潤筆料にしても相手の心持次第であり、それがどういふ低い額であつても苦情の無かつたものらしかつた。

芭蕉は流石に相當の収入があつたらうが、蕪村などは自分の俳戲畫に自句を書き入れては賣つてゐた。大雅堂でさへも繪を描いて市に鬻いでゐたことを思へば、別に蕪村の繪を賣ることなど珍しい事ではない。しかし一代の俳匠だつた蕪村もなほ俳畫に句を書き入れて、注文や誂へに應じてゐたことを思へば、路通や井月が町に乞食をしながら發句を作つてゐたことなど、珍しいことではな

昔の俳人は定収入の無かつたこと、その生活は全然人からの助力と寄進に據らなければならなかつたため、談林派のごとき幫間的な俳人が輩出されたのであらう。町家の旦那衆と芝居興行や旗亭への出入も、自ら金力働き彼らの敢て出来なかつたために旦那衆と相伍し相諍うた所以であらう。路通のごときも矢張りその誹りを受けなければならぬほど、生活的な貧困は清節を曲げてゐたと云つてよかつた。

併し有繋に芭蕉や丈草去來の徒には、俗流へは常に厳しい氣風を見せてゐたため、彼らの純粹な發句人としての氣持を損じることにはなかつた。貧の内に貧故にその心の清雅さの磨かれてゐた芭蕉には、何人もその自らなる氣魄に打たれるものを感じたからであらう。

井月は乞食はしてゐたけれど、氣持の上の自由人だつたことは、敢て自らに媚ることもなく漂々として東西南北し、すこしも自由人としての佛を變へることがなかつた。氣に入れば短冊色紙も書いたが、氣が進まなければその事に意を枉げて敢てする男ではなかつた。酒あれば事足りて睡り、起きて發句を案じるといふ全くの雲煙に身を委ねた生活だつた。さういふ生活は到底現世に於て行はるべきではないが、もと／＼俳人生活といふものが實際の氣持の上で、さういふ漂泊的な生活を自然に行ふてゆくことは、昔と何も渝りがないと云つてよい。唯、現今の俳人は流浪はしないが氣持の上で自由に漂泊的なことは、或は昔の生活形式と違つてゐるだけ、なほ一層烈しいかも知れない。

かつた。それに今は乞食はしなくともさういふ程度に近い生活をしてゐる人達の中に、詩や歌や發句を案じることなど決して稀らしくはなかつた。昔は俳人の奇行として許された逸話風な事實も、今は俳人であり畫家であつても許されはしない。貧困は市に裁かれ人から厭はれるだけだつた。それ故才能ある風流の餓人は何處までも餓人の取扱ひ以外には人々から受け入れられなかつた。さういふ意味で明治の井月なども其乞食生活を目標として通つた最後の俳人であるかも知れなかつた。

後書

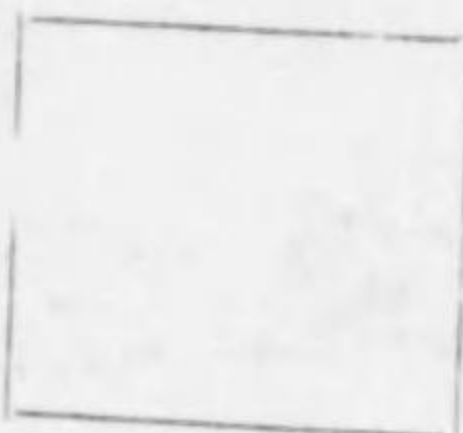
作家といふものはその永い作品生活のなかで、何か一つの古典的精神にふれる時がある。さういふ時の作家はゆたかな心で小説のゴミや、生活のゴミを吐き出す。それは美しく清い一つの憩ひであるとも見てもいい。

私が元祿俳人を中心にして或る時期には、殆それを讀み味ふことで六七年くらしたことがあつた。そのノオトがこの襟記に集成された。私はあるひはもつと後の年にふたゝび元祿の俳句をよみ直し考へ直すときがあると思ふが、いまはこの芭蕉襟記一卷が私には唯一の手がかりになつてゐる。恐らくここから私はまた書き足してゆくときのあることを信じてゐる。

著 者

現代理叢書

— 8 —



昭和十七年三月五日印刷
昭和十七年三月十日發行

芭蕉襟記

定價一圓八十錢

著者 室生犀星

發行者 竹内富子

印刷者 小坂孟

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二

發行所 三笠書房

東京市神田區西神田二ノ二一
電話九段四〇一三番
振替東京二二〇九六番

小社の出版物中、萬一落丁亂丁その他不備の品がありました場合は、早速お取
換へ致しますから、御手数ながら本社宛お送り下さいますやう願ひ致します。

現代叢書の刊行にあたりて

現代とは何か、現代を過去から切り離す指標、現代が未來に對して自らを定立すべき根據は何に求めらるべきか。現代の現代たる所以はそれがわれわれの生の營まる、唯一の歴史的時代たるの點にあらう。われわれは日々夜々に過去の文化の果實を攝し、常住不斷に未來への意識的または無意識的なる寄與を怠ることのできぬ宿命の裡に生活し、意欲し、認識し、營爲し、また分岐しつつある。而も莊麗なる民族の理想も、光輝ある國土の傳統も、それが理想として結實し、傳統として開花する當の場は現代以外の何處にも求められ得ない。この民族の光榮と國土の莊麗とを愛し慈しみ尊び仰ぐ精神は、また刻々の精進と永劫の陣痛を耐へ忍ぶわれわれ現代人の生命からのみ肇めて發出する事を思ふとき、何人も現代の紛糾と混亂とより面を背くべき良心的理由を發見する事はできないであらう。現代の文化をしてまさしくその歴史的位置に坐せしめる事を希求する眞摯なる現代人にとりては、擾々たる紛亂の裡に湖水の如き古典の沈靜を見いで、混沌たる叫喚の裡に大樹に似たる豫言の亭々たる孤高を仰ぐ事も決して難事ではない。小社が茲に新たに「現代叢書」の名を冠して哲學思想文學科學其他百般の選ばれたる現代文化の業績を世に贈らうとするのもまた、過去と未來とに對して光輝ある現代の文化をその正しき地位に於て享受と批評の對象たらしめんとする出版者の責任を自覺したからである。則ち本質的に現代的なる良書のみを選び、之を厚生的見地より最も讀書し易き體裁に盛り、紙質印刷製本其他あらゆる點に細心の注意を拂ひ、價額の低廉携帶の至便を旨として飽くまで世の讀書子の共有たらん事を期した次第である。冀くはわれわれのこの企圖を協賛され、國民の將來文化建設への一途に絶大なる支援を惜しまざらんことを。昭和十六年三月・三笠書房主識

目書刊既書叢代現

谷川徹三著 哲學的文學 (1)

谷川徹三氏はその深い叡智と鋭い批判との交流に廣く人生全般に亘る思索を徹底せしめると同時に現代の教養人に最高至聖の精神的糧を與へられる。本書には「哲學的文學」「現代文學の本質」「讀書について」「事實・眞實・眞理」等數篇を收めた。

武者小路實篤著 母と子 (2)

混沌錯雜せる現代日本文壇に燦として輝く存在であり驚異すべき話術の持主である武者小路氏の數多い作中特に傑作と稱される本書は正に氏が若き日の全精力に成果したもので、母と子の姿を飽く無く追求しつゝ社會全般の姿を浮彫した名作である

瀧井孝作著 折柴隨筆 (3)

著者の小説は現代文學の最高所に位するが又氏の隨筆も單に之を裏づける丈でなく實にこの寡作家の日常生活に於る人格の高潔と凡ゆる貴重な體驗を率直に語り得て正に名匠の面影躍如たる物がある。本書は誠に隨筆文學の至寶とも云はるべきもの

B 6 判 四六四頁
定價 一圓八十錢

B 6 判 三〇九頁
定價 一圓五十錢

目書刊既書叢代現

中山省三郎譯 オネエギン (4)

近代文學の至寶であり、ロシアに生れた最大の詩人であるアウシキンの最高傑作「オネエギン」の新譯決定版。これは驚嘆すべき美しい物語であり、淳朴な娘の一生を促へて優しく愛撫し、時に鋭く突き放しつゝ人間生活の表裏を綿々と描いた名篇。

B 6 判 三六〇頁
定價 一圓八十錢

高橋健二譯 世界文學をどう讀むか (5)

世界的巨匠ヘッセの透徹した叡智と博識と、同時に無類の讀書家としての豊かな經驗から割り出して我々にとつて無限の寶庫とも云ふべき世界文學から如何にして又何を讀むべきかを懇切に教へその間自ら讀者の技術方法を暗示した座右必備の名著

B 6 判 一七四頁
定價 一圓

大久保康雄譯 わが闘争 (6)

世紀の英雄ヒットラーが粒々染いた血の自傳でありナチスの聖典である。ここには世界を震駭させた爆彈が秘められてゐる。戰勝ドイツの因つて來る所以を明確率直に物語つたものとして之を理解することは取りも直さずドイツを理解する事である

B 6 判 三二六頁
定價 一圓五十錢

目書刊既書叢代現

兼常清佐著 日本音樂と西洋音樂 (7)

兼常博士は日本音樂の上へ批判を加へ、これをいかに高揚せしめんかを示した。又西洋音樂の長所を遺憾なくとらへて、これを完膚なきまでにわが物とせんことを教へられた。東西の兩音樂に亘つてこれほどまで批判と教示の豊富な書はいまだ嘗てない。日本音樂の將來を憂へること實に深き書である。寫眞十數葉入りの美本。

B 6判二六〇頁
定價一圓四十錢

室生犀星著 芭蕉襍記 (8)

俳聖芭蕉を論じた書は世に多くあるが本書の如き深き藝術家の理解を以て論じられたものは稀である。收める所は「芭蕉論」及「芭蕉句解」「蕉門の人々」其他「發句論」「俳道標記」等、俳句の眞髓を衝いた見事な論文である。永遠に新しき俳聖芭蕉の偉大な藝術は俳句の何ものであるかを究める事に依て理解を全うするものだ。

B 6判三二〇頁
定價一圓八十錢

中山太朗著 歴史と民俗 (9)

歴史的民俗學の權威たる中山氏の研究論文中「民俗に見る國體精神」「放氏源流考」「まびす様のひげ」「霜祭」「土手供養」「食ひ祭」「古代の分焼法と民俗」「石手紙と請取燈」「蒲團講」等十數篇を收めた。我國の民俗の秘密を、歴史の奥へ奥へと具體的に追求していつた稀有の名著。なにびとも關心を持つべきは日本の民俗だ。

B 6判三三〇頁
定價一圓五十錢

目書刊既書叢代現

圭室諦成著 道元 (10)

道元は日本の思想界宗教界に於ける第一等の人物、それだけに最も知性豊かな偉人である。道元の日指せるところは眞理の獲得であり、その眞理に對する批判・情熱・意欲は、ともすれば自己陶醉に陥り勝ちな現代のわれわれに對する無上の鑑戒である。本書は道元の誕生よりその示寂に至るまでの一生を明かにした名著である。

B 6判二四八頁
定價一圓三十錢

川端康成著 小説の構成 (11)

數限りなく小説作法の書、小説理論の書はあるが、本書ほど組織的に纏つてゐるものはない。いたづらに奇聲の音を吐いて人を愕かしたり、危つかしい理論を吐いて人を惑はしたりする事なく、あくまでも穩當で忠實で、既に學者間に定説となつてゐる小説の構成法を、文學に初歩のものにも理解し易く叙述され、小説作法の書であると同時に、小説鑑賞の書ともなつてゐる懇切なる書である。

B 6判二三八頁
定價一圓五十錢

伊東忠太著 建築の學と藝 (12)

建築の本義から説いて、日本の建築史觀又は日本建築に於ける缺陷や地盤に關する學問的研究。家相に對する迷信の啓蒙など。觸つて橋・門・柱・窓・墓の藝術的解剖と東西建築上の比較。世界一の美建築バルテノンやタージ・マハールやアヤ・ソフイヤに就ての詳細なる論考を盡してゐる。美畫寫眞五十餘圖挿入(アートの刷口拾十六頁)

B 6判二八〇頁
定價一圓八十錢

目書刊既書叢代現

シムベングラー
村松正俊譯 西洋の没落 (13) 近刊

これは西洋文明の没落と新文化の興隆を豫言した新史観である。人を魅するやうな印象的な警句の中に、特に大戦後の獨逸國民の没落氣分を奮ひ立たしめた大衆的哲學書でもある。數學・繪畫・彫刻・建築等の文化面を頗る詳細に比較研究して新しき覺醒を促す書である。本書は譯者多年の苦心になる完譯本である。(第一卷)

ノードホフ&ホール
大久保康雄譯 颯風 (14) B6判三一〇頁 定價一圓六十錢

現代の文化から遠く離れた南方の佛領群島中に芽生えた素朴にして純情なる土人の熱愛物語。所謂文明人より遙かに友愛に富み團結心が強く、欺瞞・虚偽・裏切の惡徳は微塵もない單純で素直な彼等の愛には、ほのぼのとした心の温みを感じしめる。若きアラングのひたむきな熱情に又篇中各人物の豊なる愛に泣かぬ者はなからう。

アンドレ・シュアレス
尾崎喜八譯 ドビュツシイ (15) 近刊

近代音楽の大家として佛蘭西に於けるドビュツシイの名はショパンと共にあまりにも有名である。詩的な内容を音楽の基礎にして詩的な感情や氣分を以て新しい音楽を創造した彼の生涯と藝術を論じたもの。シュアレスは近代藝術の傑れた評論家であり、譯者また既に本邦に於ける定評ある音楽評論家かつ詩人である。

目書刊既書叢代現

齋藤磯雄著 リラダン (16) B6判二四八頁 定價一圓五十錢

偉大な藝術家は必然的に偉大な苦惱者である。異常な奇怪な暗澹たる薄倅についてリラダンの天才を形成する魂の優越性について懇切なる解析が試みられた。「残酷物語」「トリビユラ・ボノメ」「未來のイヴ」等によつて近來とみに我が國の讀書界に名を高めた孤高なりし天才リラダンについての深き理解をきはめた評傳である。

石川 淳著 森 鷗 外 (17) B6判二三七頁 定價一圓五十錢

日本近代史上鷗外ほど多岐にしかも深遠なる藝術を開拓した人はあるまい。本書は鷗外の小説・評論・隨筆・詩歌に就て、鷗外の鷗外たる光輝ある業績を解剖して、「次に來る者」への豊富なる暗示を與へるものである。作家としての鷗外を論じた書は決して尠しとしないが石川氏の鷗外文學論としてこれ程すぐれたる書はない。

鼓常良著 西洋美學史 (18) B6判二五五頁 定價一圓六十錢

美の概念はいかにして生れたか、本書は先づ美學に於ける古典的形成から起筆されソクラテス、プラトニー、アリストテレス等から脈絡を引き、ヘルバルト、チンメルマン、ハルトマン、リツプス、フォルクェルト、クローチエ、コーン等に至るまでの美學をこの巻に於ては取扱はれる。近代文化の新たな構築に必須なる美學史の體系を明かにすると共に美學への入門として深い注意が拂はれた。寫眞版數葉入。(上卷)

目書刊既書叢代現

ヤンニ・ラゲリン
壽岳文章譯 トルストイ (19)

B 6 判 二六四頁
定價一圓六十錢

副題「一つの心理批判的研究」トルストイの意識のゆくへを追ひつめて行つた内面的な傳記である。全生涯を通して良心と慾との相剋に苦しんだこの近代人の背反の葛藤を、同情のこもつた批判を以て、とかく統一を失ひがちな近代人そのものへ深い反省を與へるものである。巨人トルストイを理解するにこれ程の良書はない。

マルセル・ブルウスト

近藤 光雄 共譯

愉しみと日日 (20)

B 6 判 二五〇頁
定價一圓六十錢

「失ひし時を求めて」で美しい詩の言葉に漂ひたる神韻を謳歌された作者の若き日の清淨無垢なる短篇集である。内容は「若き娘の告白」「畫家と音楽家の肖像」「ド・ブレイツ夫人の憂鬱な田舎暮らし」「伊太利喜劇断章」「街の晩餐」「バルダサアル・シルヴァンドの死」「嫉妬のはて」他二篇。いづれも清き泉の如き作品である。

坂田 徳男 譯 ト 判断力批判 (21)

近 刊

これはカントの美學である。「純粹理性批判」を読む者の必ず併せ讀まねばならぬ名著である。譯者は永らく原著を研究し極めて深き理解のもとに、難解とされてゐる「判断力批判」を實に苦心鑽骨して邦譯し、再三の校訂を経て遂に決定版として上梓するに至つたものである。本書には序論及び第一部を收む。(上巻)

目書刊近書叢代現

滿岡 忠成 日本の工藝 北原 武夫 永井 荷風

加茂 儀一 ダ・ヴィンチ 岩上 順一 横 光 利一

岡本かの子 短篇小説集 古谷 綱武 川 端 康 成

兼常 清佐 石川 啄木 伊藤 信吉 島 崎 藤 村

龜井 勝一郎 武者小路實篤 壽岳 文章 プレエクの手紙

若山喜志子 若山 牧水 プラウニオン 新 しい 路

窪川鶴次郎 正岡子規 中山 太郎 生活と民俗

瀧澤 克己 夏目漱石 鼓 常良 西洋美學史

— 行 刊 * 續 下 以 —

2-1949

17

目書刊近書叢代現

岸田日出刀	相良徳三	香取秀眞	中川一政	蘆原英了	藤島亥治郎	寺田彌吉	藤澤衛彦
日本建築史	歐洲美術史	日本の鑄金	美術の眺め	舞	支那建築史	親	明治風俗史(下)
龍居松之助	龜井勝一郎	藤平武雄	中山省三郎	踊	小林太市郎	鸞	谷川徹三
近世の庭園	日本の女神	哲學への出發	ドストイエフスキ	茶	支那美術史	詩人の風土	志賀直哉の作品
				經			

— 行刊々續下以 —

925

253

終

